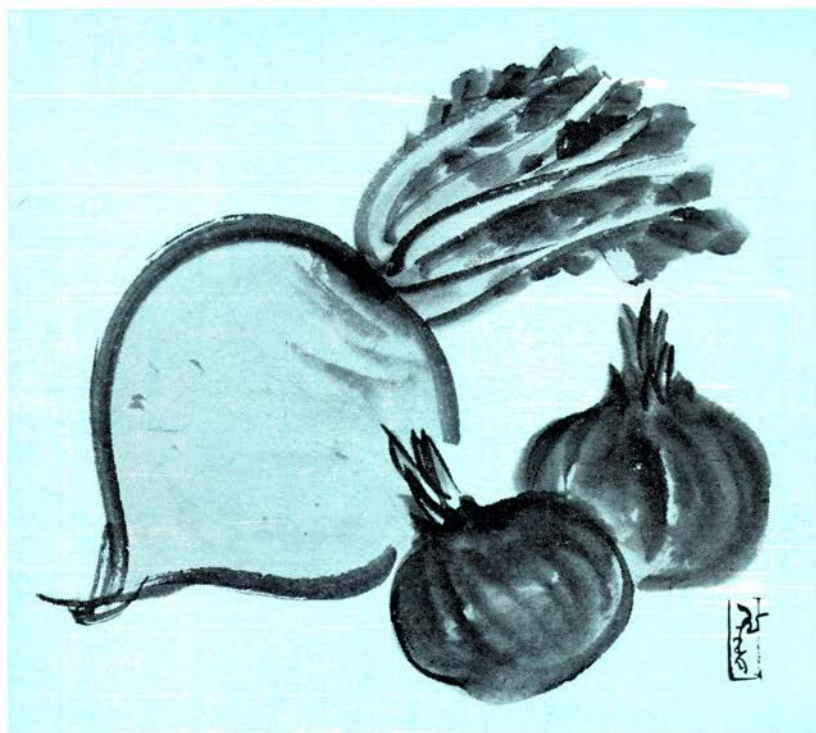


# 川柳塔

昭和四十年十一月五日印刷  
昭和四十年十一月一日発行（毎月一日発行）



川柳雑誌改題才二号

## 十一月号

# 南紀の旅はなんばから



## ＜白浜ゆき＞

準急第2きのくに……(毎日) なんば12時38分発  
準急臨時しらほま……(土曜) なんば13時10分発

## ＜新宮ゆき＞

準急なんき1号……(毎日) なんば7時45分発  
準急なんき3号……(毎日) なんば16時40分発  
夜行直通列車……(毎日) なんば22時07分発

お問合わせ・南海交通社  
(641) 8686 (341) 5038  
(361) 3126 (716) 8661



## 大阪文化祭＜第17回＞川柳大会

○締切  
○入選句集

十一月十日着限  
希望の方は投句の際百円添付

○投句先

大阪市北区中之島一丁目

大阪市教育委員会内

大阪文化祭川柳大会係

○兼題投句

各題ごとにハガキ一枚に二句ずつ、  
住所・氏名・雅号を明記

○賞

常題兼題共優秀句には府知事、大阪市長、大阪府、市両教育委員長から「文化祭川柳賞」贈呈

○席題

当日二題発表 締切六時三十分

土 (堀口塊人選)

特ダネ (中島生々庵選)

現金 (岡橋宣介選)

実力者 (近江砂人選)

大阪市長編集委員 川端直正

大手前会館三階講堂(市電「京阪東口」)

○日

昭和四十年十一月二十七日(土) 午後四時開場

五時開会

○会場

○講演

○兼題

大阪府教育委員会  
大阪府教育委員会  
大阪府教育委員会  
大阪府教育委員会

恒例の大阪文化祭川柳大会は本年第十七回を迎え、次のとおり開催いたします。初心者の方も多数投句されますよう。また、どなたも出句の有無にかかわらずご来場下さるようご案内いたします。

# ・ 今月のことば ・

中 島 生 々 庵



宇宙塵と呼ばれる瓦斯体が五十億年たつて現在の地球が出来上ったといわれる。

その地球の一点に「川柳塔」が誕生した。

この小さな「いのち」が生れて来るのに五十億年もの時間がかけられたわけである。

考えてみると、いとしい「いのち」ではある。

これからどれ位生きのびてゆくことやら。

生物というあらゆる生物の、軀を構成している物質は、常に新しいものから新しいものへ、めまぐるしく変化し代っている。このことは生化学的にも立派に証明されていて「年々歳々人相同じからず」とは感傷的ばかりの言葉ではない。

何百年とか何千年とか命を続けている巨樹

木があると聞くが、専門家の言葉によると、その樹木の芽や根の成長点は樹齢に關係なく常に若々しく、枯れ葉が落ち若葉が出るといふ工合に寿命は無限であり、海綿や珊瑚などに見るように生命を停止することがない。丁度それは私達が先祖の系図の年数を自分の年齢とするとすればまさにそれと同じであるといふのである。

「川柳塔」の寿命も、こういう意味でいえば無限であり得ると思う。

考えてみると、いとしい「川柳塔」ではある。

宿命のきびしさ　じっと目をつむる

生々庵

川柳塔 十一月号

# 川柳塔 十一月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことば……………中島生々庵……………(1)

はたらくうた……………(24)

——同人特集

丸川初甫・山川阿茶・工藤甲吉・直原七面山・服部十九平・西出一栄・  
山内静水・児島与呂志・河井庸佑・久米奈良子・野村味平・傍島静馬・  
金井文秋・橘高薫風・若本多久志・清水白柳・(順不同)

川柳塔……………(同人吟)……………若本多久志選……………(4)

近詠……………麻生葭乃……………(33)

秀句観賞……………(前月号から)……………後藤梅志……………(20)

川傍柳初篇研究続載について

川傍柳初篇研究……………(三十)……………(14)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄・  
川端柳風・高須啞三味・九十府・岡田甫・

川柳太平記……………(十)……………富士野鞍馬……………(22)

人を食った野郎たち……………(大陸放浪)……………東野大八……………(18)

未来に続く抒情……………句集「檸檬」に寄せて……………早川清生……………(38)

中級川柳講座……………スランプ……………戸田古方……………(34)

川柳塔創刊に思う……………吉田圭井堂……………(47)

思い出のひとこま……………本田恵二朗……………(17)

002は反省の番号……………不二田一三夫……………(37)

雅号ぶつちやけばなし……………福田垣方……………(36)

川柳塔社創立同人総会……………福井野迷路……………(37)

近作柳樽……………西尾葉選……………(40)

大萬川柳「額(がく)」入選発表……………松江梅里……………(40)

金泥集……………清水白柳……………(52)

作句教室……………麻生葭乃……………(53)

★柳界展望……………清水白柳……………(44)

★本社十月句会……………(薫風)……………(54)

★各地柳壇……………(庸佑)……………(56)

「立ち読み」……………(文秋)……………(59)

一路集……………「円満」……………小西雄々……………(50)

「ムード」……………服部十九平……………(50)

★編集後記……………白柳・一三夫……………(62)



# 川柳塔

若 本 多 久 志 選  
 中 島 生 々 庵 選  
 北 川 春 巢 選

大坂市 大坂 形 水

扇風機ほこりかぶつたまま置かれ  
 鍋ものがよろしゅおます昨日今日  
 衰えを話し合うのも年かいな  
 句会からとんぼりを抜け三津寺町  
 株売った札東道寄りしたくなり

火事跡を訪ね

焼け跡の一とこ花を供え居し

青森市 工 藤 甲 吉

一万歩どころか我は日日テクル  
 見ておくだけでもミンクのコート  
 究極はやはり男の女にて  
 一も嘘二も嘘三も嘘で生き

みな天を突いて麦の穂たくましや

高槻市 傍 島 静 馬

力作に触れず表装賞めてくれ  
 落書きも天平頃のは大事がり  
 踏切りの地蔵に焦る気を鎮め  
 アイシヤドウ花の素顔に惜しまれる  
 倒産旋風うかつに臨休貼り出せず

門真市 福 島 鉄 兎

出る杭は打たれる中に僕もまた  
 結婚へ発展しそうもないデイト  
 聞いてみりや美人も持つている悩み  
 切り抜ける策を女房に教えられ  
 結婚はせぬ前提の見合の座

豊中市 戸田 古方

戦争はやつぱり殺すことやつた  
グッド・オールドおさまるとこへおさまつて

精神年令も還暦とは無茶な

福耳が見合の席でよう目立ち

前の人の年令考えてたら急停車

堺市 吉田 圭井堂

裏切られどうしに馴れていても癪

妻三日留守三日とも乳とパン

ためらいがA少年にしていまい

健保では盛れぬ葉が今日の試歩

磯釣りの足袋繕うも妻でこそ

大阪市 正本 水客

池の島二つ三つ縫う黒き蝶

夏の陽へ土佐絵の襖ほの暗く

早咲きの萩がこぼれて人がいず

遮断機で待つ間に思案かえている

行けるときに行つとかなあと妻さそう

大阪市 市場 没食子

嫁した娘と別家した子の梅も潰け

若い若いと父をおだてて働かせ

内孫第一子誕生

男の子です産声あげてますと電話

孫の顔みてりや並んで寝とうなり  
足止めに会社の株も持たされた

大阪市 西田 柳宏子

颱風へ気休めにも似た釘を打ち

日曜大工済んで足採め腰さすれ

リーダー完備颱風に振廻され

あさりと折れりや折れたが氣に入らず

新婚の弁当箱がまだ続き

米子市 小西 雄々

川柳塔発足を祝して(二句)

一粒の麦にも柳魂燃え上り

落葉焼く尼僧かなしい過去があり

家貧しされど孝子をあてにせず

結核も中風もなおり癌で死に

啄木の詩もそえてある置手紙

大阪市 不二田 一三夫

孤高ということにして四面そ歌

JISマークのような男で平社員

億というお金を持つててやせてはる

生活上上やつと四球を得たほどの

仁義を忘れ梅ぼしの味を忘れ

山口県 長野 井蛙

悼路郎先生の御逝去

たそがれへきて灯を見失い

簪の目崩して目出度い荷が届き

風呂値上げ痛くない手を挙げて決め

えくぼでは効なしと見た泣き落し

倉敷市

田垣方大

日向ぼこ老人という背をまるめ

合槌をうてば賛成派にされた

惚れている方は後からついてゆく

女教師が帰りおんなの話する

高槻市

若柳潮花

鈴虫は鳴かずお茄子もひからびて

曼珠沙華彼岸の寺へつづく道

君病みし便りが届く秋なかば

清元の恋は舞台の上の恋

竹原市

山内静水

居どころが判りろくでもない手紙

どちらにも付かず本当の事を知り

歩く会歩いて行けぬバスつらね

恩給を捨てて嫁いだ意地があり

大阪府

早川清生

見たい海胸にことしも夏がすぎ

町の寺隣も寺号うる覚え

外は雨テレビも傘をさすドラマ

釈迦老いてようやく女犯から逃がれ

岡山県

浜田久米雄

旧友が思い出せないほどに禿げ

またひとり死んだか名簿線を引く

スタミナを考えている市場かこ

出しやばりの癖が孫までつづいて居

加賀市

野村味平

捨て猫を捨てれば先きに戻りおり

銭湯の値上げ湯船は二派なり

秋風が吹いてなすびも値が上り

欲はない呉れるものなら貰つとき

広島市

弘津柳慶

オツチヨコチヨイがもう新薬を持つて来る

バス発車ヨロヨロと席につき

実社会一たす一とはいかなんだ

血が噴いているのに外科医ののろいこと

堺市

富岡淡舟

定年と云う人生の駅に着き

訪ずれるチャイムの音もころよく

郊外はよろしおますが蚊に困り

末の子につなぐ夢こそ我が命

大阪市

橘高薫風

大嘘をついて大きな笑い声



水柱に待す正装のパーテンダー

屈辱の紋章女史に坐りだこ

恋は知らぬが胸には日向葵の刺繍

枚方市 宮川珠笑

おしつこを聞きとれなんだママが詫び

来年が目当てか護岸抄どらず

子を旅にだして夫婦に長い夜

恋人の上衣幸福そうに持ち

大阪市 金井文秋

氣にすると知つてて禿げて来ましたな

不景氣はこたえ景氣は他所へ行き

買うのにはてれくさい本盗つて去に

インターチェンジここは昭和の関所なり

大阪市 西出一栄

家政婦の独裁主義をもてあまし

叱らねばよかつた寝顔のあどけなさ

六十へ抵抗してるよな派手好み

着物着物と灰になるまで女なる

岡山县 大森娛句楽

師を憶いて

虫も泣く秋天國の句碑に立ち

一日を怠けて蟻の塔を見る

川柳塔を永久に大阪名物に

桃山の石垣につぐ塔なれや

野党側釣られる餌を撒いて見せ

大阪市 石倉旅風

秋の音今朝風鈴にしらされる

売つていたから買うて来た走馬燈

釣つているひとの人生考える

戒名も短かい方が好きとなり

大阪市 山川阿茶

他所の戦争豆粕にふれ芋にふれ

年寄が家で一番野球好き

洋服のよい方を着て車にし

秋ばれの昨日の風が嘘のよう

岡山县 直原七面山

忙中に閑 妾宅で昼寝

深酒はいけませんよと聴診器

腹割つて見せたいなどと口説かれて

惚れた弱味の金を借りられ

岸和田市 内藤きさ子

集金人下駄をそろえてゆきとどき

よう断わらぬグチは受話器を置いてから

チャネルのどこをまわせど歯が痛み

秋風へ好きな単衣で茶に招ばれ

大阪市 福井野迷路

炎天下砂漠のように蟻は行く  
長話遂に核心には触れず

各停でぼつぼつと行く余生哉  
うしろから女の顔をシヨウウインド

大阪府 西 いわを

連鎖反応姉げんかに迄及び  
忘れたい過去も貼つてた写真帖  
孫抱いてこれが分身かと思ひ  
台風来猫と小部屋でちこまり

今治市 越 智 一 水

妻が子を叱る日なだめ役につき  
やぶれた障子郵便受にされ  
無力なる男の妻がきれい過ぎ  
駅弁屋身体くの字に声を出し

西宮市 若 林 草 右

その昔抜いた白髪をいとしがり  
台風のお通り下に下にの東海道

路郎先生を想う

よきデーター一つもなくて今日も昏れ  
瘦せ細る腕廻診をにぶらせる

大阪市 本 多 柳 志

ささやかな抵抗辞表まだ書かず

大台高原探勝

紀の川になるせせらぎで手を洗い  
見下せば伊勢も大和も杉の中  
倒木に生きてるような鶯が咲き

高砂市 吉 原 紅 月

背が低いから縦じまの服が好き  
耳の痛いはなし妻楊枝をくわえ  
倦怠期こけしも棚に寝たまんま  
煎餅嚙む音に孤独をふと感じ

笠岡市 木 山 遠 二

庭を掃く手へ新聞を配つて来  
家中に蚊が二三足居る九月  
恩師ヨボヨボし給いて謝恩会  
風呂焚の仰ぐところに屋の月

京都市 松 川 杜 的

カレンダーに○印あり夢がある  
マツチ一本擦るにも女は女  
退職の途端直角の礼になり  
父に子を叱らせて妻にある魂たん

平田市 久 家 代 仕 男

胃が痛みもしやと思う年になり  
二号さん三昧を吊した部屋で病み  
いつの間にか微臭い父となり

毒舌のそこが値打ちのように言う

奈良市 宮口笛生

朝顔がてつぺんで咲く夏の終て

旅より

斜から錦帯橋の良さを撮り

満潮に浮く回廊を蟹が這い

原爆のきずなドームはそのままだに

布施市 久米奈良子

つけとどけ効いたか顔のゆるみよう

台風へせいといっぱいの釘をうち

何かしら心がはずむ髪の出來

さからえば母の白髪が目立つなり

大阪市 児島与呂志

早出遅出早出遅出盗人の如く

すぐばれる嘘と知つてついでに來る

照れくさい顔で初発を待つ二人

旅カバン母が案んずるだけふくれ

姫路市 小畑自由朗

あゝ路郎先生

鬼共を一喝浄土へ向かわれる

祝「川柳塔」創刊

天高く川柳塔のそびえ建つ

張切つた街を台風それて荒れ

隣りの子のさんまの匂いをポチが追ひ

大阪市 河井庸佑

如才ない男にあつた読み違い

ご期待にそえぬ不肖の子に育ち

味方まであざむく程の慎重さ

きようからは対組合の管理職

大阪市 宮地双楽

遺産わけで

兇葬にまさる嬉しい子の善意

震う手でまだやめられぬ盃をうけ

聞きすてにならんとからむ縄のれん

留守番じや埒があかんと見たか去に

大阪市 福島正則

ジェット爆音もう珍らしくない怒り

パチンコで時間をつぶすうまが合い

サーベルの頃の巡査の頼母しさ

爪染めて何故赤ちゃんと添寝せぬ

豊中市 寺田花宵

タクシーもバックしてゆく盆踊り

植木屋の負けないよさを買う夜店

三人へ傘二本借す新世帯

停電を隣視いてたしかめる

大阪市 米虫一乃字

秋祭母に甘えた記憶など

朝刊が夕刊と来る分譲地

つり銭が鼻先へ来る満員車

登りたい富士を車窓に見て通り

大阪市 宮尾 あいき

特大のヒップ支えたハイヒール

汚れ目の見えぬ顔とは御あいさつ

オシツコは云えない孫のコマソング

神経痛なおす御医者も神経痛

愛知県 原 峻一郎

交通が不便で空気のうまい町

鍵ツ子の無口がいきなり犬を打ち

帰るたび伸びる故郷が嫌になり

実力が落ち肩書に元がつき

新居浜市 小林 孝正

ひび割れた夢を大事に女生く

ビジネスで来た焼香の長い列

平社員抵抗くちびる嚙んだだけ

別れ話の喫茶戸外は雪になり

広島県 杉 原 愛 鳩

初恋は一番星のようなひと

クリームもつけぬ娘にも困り

サボテンの花よろこびにゆれて咲き

およばれへ妻が持たせた胃のくすり

京都府 西村 句楽坊

大居士も餓鬼も同座の盆供養

朝夕の鐘が詩となり歌となり

気のきかぬ骨 法衣着た喉に立ち

数珠切れて坊さん念仏ひろつて

萩市 和 泉 松 風

母の味故里の味ませ御飯

先祖あり子があり孫もある我が家

ネグリジェ着ても鏡の前に立ち

しば餅をかみしめ母の味思い

大阪市 中 川 滋 雀

救急箱さて要る時に無い薬

飲み直す話ジョツキの底が透け

こうなつた愚痴引き合いに又出され

もうしない約束泣き泣きさせて済み

倉吉市 奥 谷 弘 朗

小役人望を捨てた顔に見え

雑草のねばり強さを見せて左派

父ちゃんと二三度呼ばれただけの倅

加賀市 那 谷 光 郎

あれからは無口質札見た彼女

古本も屑屋しばつてキロで買い

山の温泉に俗塵洗う瀬音きく

大阪市 水谷 竹莊

本気にはしないだろうかと云う話術

借り衣裳氣にして女酔えもせず

兵庫縣 河原みのる

子守唄親もいつしよに寝るつもり  
大声に泣いてダイヤル子がうばい

高槻市 山田 季賛

広重の富士をながめて超特急

芋の葉に皆個性ある首を振り

六十の母はやつぱり紅が好き  
灰皿が満員になり会議すむ

ひや酒が揺れて夜汽車のものの思い

小松市 関戸 宗太郎

ギブスまだ取れぬに罰金追いたてる

孫の守りのんきそうにと人は言う  
そんなこと無理とも言えず敷かれてい

陶像の色鮮かに通り雨

こりやうまいとうつかり言つた酒の肴

色艶を河原の底に石が秘め

新居浜市 安藤 桂仙

京都市 室井 八九寸

さまたげ知らない仁和寺秋とんぼ

チョンマゲの恋も泌みてる城の堀  
下見して来たに夫婦の氣が合わず

甘酒の高さにも触れ觀光談

水道のパイプも汗をかく暑さ

手あぶらに光る歟の柄汗すべる

堺市 高崎 雄声

岡山市 池田 古心

女嗅遠くなり寿命悲しむ

張りかえた障子の白に氣が和む  
しあわせは齡を忘れる忙しさ

老婆の舂叱れば嘔みつかれ

露出が是か犯すのが非か

百姓が弾けば算盤赤になり

鳥取県 清水 一保

読みあきた灯下へ虫の音がきれい

横になる時のダルマはこわれてい  
めぐり合う人生にアスファルトが焼ける

胃カメラを飲んだ話していたくなり

女餌食にその名をヒモという

西宮市 樋口 舟遊



大阪市 今西章雅

本卦にも近く愛憎捨てられず

未成年禁止の映画見に這いり

心にも無い事云うた氣重い日

富田林市 吉岡美房

犯行を戦果のように書いたメモ

億のつく汚職のメモが走り書き

火花散る溶接の汗腕で拭き

富田林市 岩田美代

いつのほど情緒とぼしく利にさとく

スイッチで夫意のまま動したい

逃走の構えで野良猫愛しあう

岡山県 横山一声

男のような女 女のような男と歩いと

十人並と言う器量にも大差あり

庭石一つ置くに庭師ひまが

大阪市 天正みさ子

退院へ松葉の友に見送られ

療養所形とならぬ愛にもえ

不快指数十七号が抱いて去に

鳥取市 河村日満

わが性の弱さ中立論となり

鳥取しやんしやん祭創設

女には女の線の傘踊り

大阪市 田中多幸

外孫は姓の違いで遠慮勝ち

新聞代値上げの記事は虫眼鏡

新居浜市 近藤凡生

無縁墓すげなく整理されてビル

時計なら分解掃除の年になり

堺市 青山慶之助

生甲斐は金しかないとちとあわれ

下手から出れば下積みすぐのぼせ

玉野市 小谷嘉一

非売品今の相場で自慢する

人間の気まま地球でものたらず

★

菊沢小松園

朕おもわず敗戦の歴史

金廻り秋風の立つ膳の上

簡単にあやまることも生きる手か

諦めて見れば何んでも無い女

女迷う誘惑の手と救いの手

中島生々庵

自問自答 小ぎれいに暮らす手を覚え

老醜つめたく過去の暮らしを秘めたがり

ご順に奥へ あなたまかせの背を押され

あつ爛でなければ冷のコツプ酒  
弱肉強食気にしない気にしない

松江梅里

出過ぎてなくても困る水騒ぎ

別居でもしたらとひとの気も知らず

さよならの語尾が涙で聞きとれず

ホステスの恋は造花に似た虚飾

しほるだけしほり手にとつて逃げ

清水白柳

植林のいろどりがありバスゆれる

手におえぬ顔だが眼だけ笑つて

六三三四学制に似た家を借り

着飾つた女を脱がす眼に出合う

昼飯代合理化という値上げする

川村好郎

時代のずれと少しは胸のおさまりぬ

これ以上変つてくれるな先斗町

今年また何も云わず咲く野菊

自分だけ内緒のチップ貰つた気

鼻々を孫に教えて叱られる

北川春巢

さすが医者の子注射ぐらいでは泣かず  
ミリヨネアーというた音がなつかしく

収集の趣味はいつさい子に譲り  
スポーツの秋読書の秋と重なつて  
観光バス酔わぬ秘訣の目をつむり

西尾栗

上高地

河童橋写真を撮す順があり

夫婦滝親子滝とてバススリル

奉仕料だけの奉仕という旅愁

大阪弁で信濃の空の碧さはめ

浅間温泉にて

出湯の窓乗鞍常念指呼のうち

若本多久志

電話鳴る度不渡りかと思ひ

嫁がせてからまだ続くこの苦勞

人間と人間勞使の席を分け

補聴器が要り がんこさも増してくる

人の世の掟わびしく未亡人

川柳塔の創刊を祝す

阿部佐保蘭

# 川傍柳 初篇研究

(三十)

共述 前田喜代人 幹事 川端柳風  
共述 岡崎重義 整理 高須啞三味  
共述 清 博美 指導 十府  
共述 藤井和雄 岡田 甫

380

むすめともいわれかゝさんともいわれ

長笑

岡崎||これもお馴染みの子持ち踊り子。

四五人の親とは見えぬ舞の袖

(タル初)

振袖を着たばかりで十ヲかくし

(安四礼2)

等の類句で判る。

高須||変に持って回った言い方はかりの

句の中に、この句や四句前に出た

376閑取の恐々かける涼み台(長笑)

のような平明な、どっちかというと平凡な句が、ひよいひよいと出て来るのは、妙な

気がするが、この長笑という作者の句は、

数は余りないが(既出20才)

333爪ばかり仕舞って跡を嫁頼み(長笑)

などの如く、素直な句なので、好ましい。

丸||賛。

岡田||同。

381 口へ袖あてゝ昼寝へ棒を引

眠狐

岡崎||娘のいたずら。自分でおかしさに

吹き出さない用心に「袖で口をおおい」な

がら「昼寝」の「恐ろくは男の顔に、墨な

どで「棒を引く」という。写生句。

清||ヒゲでも書いているのであろう。

藤井||賛。乳母や下女の悪戯とちがっ

て、ほほえましい情景だ。

高須||「口へ袖あてゝ」を、おかしさを

こらえる様子、にだけ取らず、そっと忍び

足で来る女性の「息を殺す」情景をも考え

たい。しかし「昼寝へ棒を引く」という表

現は、相当乱暴な表現で、一步ふみはずす

と、一人よがりの「難解」となる。幸い、

この句は判るからよいが、こういう表現が、

古川柳を難解なものとする、一つの原因と

なっている、と思うのである。

丸||賛。

岡田||同。

382 口ハ四郎 奥に八九郎で眠かさ

水砥

岡崎||吉原の繁盛ぶりである。「口は四

郎」の口とは、大門の入口で、その右側に

番所があり、そこには番人四郎兵衛(廊内

から毎月十二人ずつ選出され、四人ずつ一

日三交代で詰めた)が、主として遊女の逃

亡に監視の目を光らせていた、のを言い、

「奥には九郎」とは、廊内四隅に祭られて

いた稲荷神社で、左側の奥隅のがくろすけ稲荷”であった。

九郎介へ代句だらけの絵馬を上げ

(タル二)

九郎介は化けて出たがる願もあり

(室十一梅二)

など、遊女の信仰が篤かった、のを指す。

清〓四郎兵衛と九郎助と、二つの名を黒

白になぞらえたもの。

高須〓五郎、十郎を一つずつ少なくした

四郎、九郎が、白と黒に通じる。面白さを

ねらった句だが、それと「賑やかさ」が、

ピッタリついていない。ただその洒落だけ

が見つけ所という句で、古川柳の一つの短

所を示している句と言えよう。

丸〓「口・奥」「しろ・くる」の対照だ

けが面白い句。

岡田〓諸説に尽く。

383 是が一徳と四人り出来心

単 弓

岡崎〓この「四人」は蹴鞠仲間。蹴鞠と

は、七八寸の鞠を互に蹴り渡す遊びで、四

人か六人、または八人です。四句前にあ

る。

379 損のしついで鞠場から女郎買(一甫)

と同趣向の句だが、帰りに吉原へ外れる、

この遊蕩児達は、蹴鞠遊びの趣味を持って

いたからこそ、帰りに女郎買いの機会もある、というわけで「是も一徳」と屁理屈をつけて自賛している。句である。

清〓蹴鞠の後で女郎買ひも出来るが、反

対に家は蹴鞠に行くと言って出て、吉原へ

繰り込む、という手もある。

藤井〓なるほど、小生には不解の句であ

ったが……。

高須〓現代の麻雀と同じで、気の合った

四人が、面白く遊んで後で(麻雀同様、勝

負事だから、若干の賭け金もしたのであろう

から、それを元に)吉原へ行けるのだから

「是は一徳」に違いないが、蹴鞠を口実に

という清説は「出来心」とあるから、成り

立たない。

丸〓賛。

岡田〓同。

384 一ト塩すると実体に息子成り

秋 紅

岡崎〓「一ト塩」は銚子の暗示。銚子は、

勘当されたドラ息子の落ち着き先、と決ま

っていた。銚子の浜へやって、塩風にあた

らせ、一応苦労をさせると、道楽の目もさ

めて、実直な息子になる――。

清〓賛。勘当息子の配所は銚子だが、さ

て銚子で何をしたか？ またどんな生活をし

たのか？ 知りたいものである。

藤井〓礎稿に尽く。「一ト塩」が利いて

いる。魚を一塩すると、身がしまって、保

存し易くなる。身も心もだらけた息子を、

勘当して銚子のさる家に預け、自分の謹慎、

一二年して改心の状を見て、許されて江戸

へ帰る、のが常道となっていた。即ち、道

楽息子が配所の月を眺める代表的な地名が

「銚子」だったので、銚子で何をした、と

かいうような深いセンサクは必要ない、と

思う。

高須〓「一塩」ということは「きつ

いキウウメイ」をした、ことぐらいでよい

のではないか？ どうも銚子までやってし

まった、とは考えられぬ。「一塩」と軽く

言っているの、ちょっと「塩をふった」

程度と取りたいのだが……。

前田〓「一塩」は高須説を取る。仕置き

をされる意で、この句の焦点は実体(じつ

てい)にあると思う。左の類句がある。

実体な息子 汁かけ飯を食ひ

(タル一四)

実体な息子 親仁に嘘をつき

(タル五九)

丸〓高須、前田説に賛。

岡田〓同。銚子までは考えないでよろし。



## 川傍柳初篇研究

### 続載について

— お読みになる方のために —

これで「川傍柳」（かわぞいやなぎ）序文（あり）の22丁まで、済んだわけである。この研究は、丸先生を指導者に、岡田先生を最後の補導者として、川端、高須、前田、岡崎、清、藤井の六人を共述者に、輪講形式で始められたもので、岡田先生主宰する近世庶民文化研究会で計画され、同様の形式で発足した研究グループが、他に二組あり、我々の初篇と同時に、二篇、三篇が論講されたのであるが、故麻生路郎先生の懇望で、我々の初篇論講が「川柳雑誌」に掲載され、その四五九号（八月号）までで二九回になり、本誌が続稿を載せてくれるのは、三十回からということになる。それで、今までのこと、本稿の読み方などについて、ちょっと申し述べておきたいことがある。先ず、原句の頭につけてある番号は、句の順序を示すもので、1は第1丁の第1句であり、本稿最終句の34は最初から三百八十四句目の句というわけである。——一頁は大体九句、一丁で十八句であるが、中途に「開き目」が一行入るから多少ずれているが、大体九で割れば、その

句の出ている頁は判るのである。

そして、輪講は前記の通り、川端、高須、前田の順で回り、最後の藤井から丸、岡田両先生の閲覧を経て、もう一回前の順序で回ることになっている。次の丁のときは、一番初めの川端を最後として回り、前と同じ形で、第二回が回り、回り終わった原稿が、高須の所に集められて、整理（清記）されて、本誌の原稿となる、というわけなのである。

それで、岡田先生の注意もあって、輪講では「賛成」「その通り」「意義なし」など書かれていた無意見の記載は、全部原稿には取らず、原稿は極く読者本位に整理され、あることを、承知されたい。即ち、本稿中に名前の出ていない諸氏も、輪講の方ではみな発言しているのに、丸、岡田両先生以外の「賛」なる発言は、行数節約の意味で、整理稿には載らないものと諒承された。

なお、原句は原典（原本）のまま、文字づかいも仮名づかいも、そのまま写し、供述者の説明でそれが判るようにしてある、のだが、たまたま誤写・誤植がある。しかし、他の誤まりはともかくとして、原句の誤まりだけは厳密に訂正しておきたいと考えているから、よろしく。

〓 四〇・九・二〇〓

雑

詠

大阪市 橋 本 緑 雨

秋空に一人淋しく留守をする  
老人もついで行きたい空青し  
まま事の餌を求める雀かな  
日当りで呉座しいて孫とあそぶ

名古屋市 長谷 川 鮮 山

台風禍来年はやる屋根瓦  
当たたらあげる両手を出すこぶし  
開放感女嬉しい事を云う  
自分から口を開いたお人好し

長野県 高峰 柳 児

喫さしを喫ってむせているみじめ  
平和だけ取柄僻地に住みなれる  
共稼ぎ産む計画もありはあり  
主流派の下積にいて練る謀叛

和歌山市 秋 月 宏 方

週刊誌なるほど肩もこらぬ記事  
天井に止って蠅の小休止  
有名無名癌は容赦をしてくれず  
人間が勝手にきめた祈禱料



## 思ひ出の

### ひとこま

本田恵二朗

昭和二十八年一月七日というともう十二年半も前のことです。路郎蔑乃ご夫妻がその頃の住んでいた岡山県北の山狭の町にはじめてお出下さいました。折柄降りしきるぼたん雪にご夫妻は大満悦でした。

うれしさは見せたい雪が降ってくれ

私の住いは窓を開くと山あり谷あり川ありのとても絶景なんです。雪化粧をした姿はまた格別です。酒好きのご夫妻はコタツで雪見酒です。理屈なしの天下泰平です。

雪の窓いっぱい開けると酒の声

蔑乃夫人は陣太鼓が聞えそうなど述べられました。義士の打ち入りのシーンを浮べておられたらしい。私はキジのすき焼を約束していましたが、キジが中々手にはいらず、柳友達が手分けしてやっとなこさ一羽せしめてくれて約束をはたしました。十数名の柳人にかまれたご夫妻は百彩のゴキゲンサンで更けるのを忘れたての柳談の花でした。

愚居に一泊して頂きましたが、翌朝は一尺以上も積った銀世界ではありませんか。何十年振りに眺める景色だよとはしゃいでおられた姿が今もってありありと浮びます。

雪の道師の靴跡を踏んでみる

路郎師は中々の健脚家でしたから、青年のような足どりでどしどしと雪を踏んで行かれます。それに引きかえて蔑乃夫人はおいてきぼりのカッコになります。私は姫路駅までお送りすることにして同車しましたが、雪深い道をのろのろと進む車がまた楽しくて蔑乃夫人はお姫さまになったみたいとおっしゃる。

なんのことかと聞けばお姫さまがトナカイのひくそりに乗ったの旅みたいなんだそうです。詩的でロマンチックな構図ではありませんか。あの頃あんなにお元気だったのに、たった十二年ばかりのうちに遂によみぬの国へと旅立ってゆかれました。惜しみても余りありの一語につきます。七月十八日の告別式のご仏前にはべって、私は以上のような思い出にふけておりました。ご冥福を心から祈りますと同時に蔑乃夫人のご健康を祈ります。

なお誌論四百六十号という偉大なる足跡を残した川柳雑誌の功績は長く柳史に残るものと確信しますが、今回その遺志と流れとを受け継いで川柳雑誌が勇ましく呟々の声を挙げましたことを心からうれしく思います。

路郎師のご冥福を祈る心が具体化した唯一のものとして申されましょう。新しい門出の川柳雑誌の前進また前進を祈って止みません。併せて超党派のあれ、門戸を大きく開けと希望させて頂きます。

(四〇・八・一六)

## 川柳塔社同人総参加！ 一人一句／(60字以内の句の説明)

新春号を飾る

### ユーモア特集！

いま川柳で忘れられているものはユーモアである。雑詠や句会で発表したユーモアにあふれる句をだれもが一句や二句は持っている。そこで同人全員がそのうちの一句を新年号に発表していただきたいのです。

用紙は原稿用紙  
十一月二十日着便

## ・大陸放浪・

## 人を

## 食った

## 野郎たち

### ・東野大八・

大陸川柳人同窓会を催した富岳荘主人の中野柳陽さんは、大したサムライであることは先刻ご承知の方も多いが、この人との大陸だんきは、へたな小説より面白い。本名は渾之丞、名からして一風交っている。

柳陽さんは歳七十を越えているが、活達として明朗、一見六十そこそこにししかみえない。りゅうとししような服を長身に着こなし、音吐ろろうと説きたり説き去る話術はまことに人を魅するに余りありだ。この人の若いころの写真を見したが、今どきの映画、テレビの二枚目などくそくらえの風爽たる男まえである。このやさ男で波乱に富

んだその生涯は、そのまま生きた歴史の 한마ともいえる。

中国革命の初年、第一発の革命のノロシを挙げたのは、陳キビという人物で、この人の頼みで亀甲型爆弾という物騒なものを腹に巻いて運び、陳一派が各地で演じるテロの手伝いをやった。生命がけのその仕事に陳は、お礼のしるしに金はいくらでも、といったが、アホなことをいうな、金で生命を賭けるほど安っぽい日本人と思うか、とタンカを切ったので、相手は大いに感動、こと成就のあかつきには、どんなことでもしてその労に報いよう、といったという。山中峯太郎とはまた別口の革命の志士であったわけだが、陳は残念ながら上海のガーデンブリッジの橋上で、敵のテロに逢い壮烈な爆死を遂げてしまった。

この中野さんは、伊達順之助とも交遊があった。伊達順とは壇一雄の「夕陽と拳銃」のモデルになった馬賊の大親分である。中野さんのあったのは安東であった。

当時伊達は満州国の中將で、反満抗日軍の果窟だった間島地区の掃討にあけられていたことで捕えた敵匪の処分は、伊達のサインがなければやれなかった。このサインは毎日のように続けられていた。

安東には由良之助という立派な日本人経営の料亭があり、この美女才女は遊芸十八般に通じ、各地の皇軍慰問の公演隊までくり出

しており、当時は満州国切っての超一流ではなかったか、ところである日宴席で、

「中野君もいることだし、見渡したところ新顔も多い。どうだ例の奴で一パイやっか」と伊達がいい出した。よからうと居合せた伊達の取り巻きが早速用意にかかった。

由良之助の芸妓もまじえ、やがでジュージューと派手なすき焼パーティがはじまった。うまい、うまいとナベを開んだ連中はゴキゲンで舌づつみを打ち、なかにはゲップの出るほど食べた奴もいる。ところで中野さんだがはじめその肉を口に入れてみたがどうもおかしい。タレや味つけがなくなるとそいつが白けてしまい、まるでガムのカスでも口にしていうような具合、ついに吐き出し、

「何がうまい、こんなもの」

と別のものばかり食った。やがて宴も一山越えたころ、新顔の一人が

「ところでコレ、一体何んの肉なんです？」

ときいた。伊達がその一言をきいてニヤリと笑って、腹心の一人に「おい」とアゴをしゃくった。すると待ちかねたように一同の前にどさりと投げ出されたのは血のじんだ新聞包みで、そこからニューとでたのは人間の手のひらだった。一同たちまちゾオーとなり、あちこちでゲロゲロ、大騒ぎとなった。

「イヤァー、愕いたなあ、そのときは……」

と中野さんはい。こういうことをやっていったのでは伊達もロクな死に方をしない、彼は終戦と同時に青島で捕えられ、極刑に処せられている。

当時の満州は万事殺伐で、新京では弁髪之首をふりわけに結んで肩にかけ、白昼大道を歩いている男をよくみかけたそう。山海閣などでも人肉パーティが時折行われたともいう。

皆さんはこれをお説になって大変お氣持を悪くされたことと思うが、どう品よく書いてもネタが悪いのだから致し方もございますまい。

「河本大作さんにも会いまして、よく張作霖のことを話してくれましたな。河本さんの話では、当時作霖を殺すか、殺さないかで、十銭銀貨をほうりあげて、それに賭けた。表が出たらヤメ、裏が出たら決行、結局裏が出たので、ではやっつけることにするかーいやこれは本当にあった話らしいですよ」と中野さんはい。

昭和九年の暮だったか、私は中野さんの話に出てくる張作霖の爆死した場所を見に行ったことがある。

奉天城内を東北に出はずれたところで、汚い満人街が鉄路の堤防の下にごちゃごちゃ並び、その堤防の切れ目が陸橋であった。トラックに荷を積んでやっ通れるぐらいの重さ

だから、爆破する仕掛をやるには格好の場所だ。

とにかく河本大作が十銭銀貨の裏表でコトを起したという点には私は疑問がある。要はことを決行する日どりか、それとも時間かそのような具体的手段を講ずる瞬間を心ぎめするためにとられた行為のような気がする。

河本大作がこの作霖襲撃計画を樹て、現場で直接その手を下した指揮官が東宮鉄男大尉である。

牡丹江に東宮会館という立派な洋館が建っていたが、これは東宮大尉が軍を退くや早速に手がけたのが北満の開拓村建設で、当時東宮のことを現地では「開拓の父」といっていたが、会館はその顕彰の記念物である。

東宮は一見山法師の如く、新しい番傘の如くあぶらぎった男で、協和服をきこんでよく馬にまたがり、弥栄、千振などの開拓村めぐりをやっつたものだ。

牡丹江に料亭「とみや」というのがある。

彼の名にちなんだもので、私はこの男とそこで一パイ飲んだことがある。酒くせはよくない。眼を半眼に据えた彼は、やがて帳場から日本刀をとりよせ、鉄つばの大きいその古刀のサヤをはらい、こうこうたるその中身をじっとみつめていたが、やにわにヤツと気合一声、青畳にそれをつきたてるや、

「もう飲めぬなどとお前がぬかしたら、こ

れてブツたぎる」

と脅した。彼の愛人の芸妓はなれたもので、何をやばなお前さん、と床の間の満州ざくらの花一むらゐを、その古刀の柄糸にさした。あとで彼が坐を立ったとき、この女はこう私にささやいた。

「あのひと、予備役になったので荒れてるんですよ、開拓村などオレの性にはあわん、というのが口ぐせなの」

私は白粉やけのしたその女の細い首を眺めて、どんな豪傑にも人間のものの哀れがつきまといっているんだなあ、と思った。

敗戦当時の開拓村の腥穢きわまる最後は知る人ぞ知るところだが、その陰の演出者がこんな男だったのである。

泊宿のご人柳  
十分から駅大

旅館  
屋花立

風薫高橋

大阪市北区堂島上2の52

電話 341・4613 番



# 賞鑑句秀

— 前月号から —

創刊号を手にとれば、みなお馴染みの顔ばかりで、こんなうれいしことはない。雑誌が心身ともに新しくなったせいか、秀句も目につき、希望を覚えた。

本号には、路郎先生を悼む句。とりわけ自分をふり返り、思いを新たにするとする風な句が、多数あり。これはとりも直さず、作句の要諦である「のっぴきならない現実」に直面した結果であって、これも好感のもてることである。さらに次号以下の力作をこ期待して歎まない。

恩師の死その夜眠むしとも眠むし

(薫風)

薫風さんはつねに路郎側近にあって、いつもの聲咳に接していたのは人も知るとおり。父とも師とも仰ぐ、老師の健康を案じぬ



## 志 梅 藤 後

いていたと思われる。病い革まっては別室から用を弁するばかりで、隔靴搔痒の感はまぬかれず、その感じは肉身同様であつたらう。また計を發せられるや用務は倍加し、心身ともに疲労し、曉明まで睡眠をとる間も無かつたかと思う。事情を知らぬ人には、この句の「眠むしとも眠むし」は理解できないかも知れないが、絶望と混迷が彼れの弱い神経をくたたくにしたさまが、よくうかがわれる。枯れてゆく巨木ささえるものがなし

(愛鳩)

このあいだ亡くなった、シュバイツアー博士のごとき偉人ですら、限りある人の寿命には施こしようがなくこれをせきとどめる何物もない。これと同じく、亭事たる巨木も、ひとたび枯れるだんになれば、もろくも枯れ

る。しかも、どう支つかえ棒のあてがいようもないものだ。この句はそうした人生の自然さを、すらすらと詠んで余すところがない。運動会わが子ばかりを追うカメラ

(庸佑)

秋は運動会のシーズン。どこにもよく見る情景であるが、パパ、ママがついて行くのは、幼稚園か、一年生の場合に多く。都市周辺ではマイカー族が相当の数を占めている。大抵8ミリか高級カメラを持参して、それこそわが子ばかりを追いかけて、見ている方が可笑しくなる。これも子をもつ親の愛情かと思えば、ほほえましくもなるが、先生の目からはすこし滑稽にも思えてくるであらう。庸佑さんは学校の先生と聞くから、この句は、とくに興味が深かい。

内職の手へ昼の蚊がつきまとい

(遠二)

内職という仕事は、仲々苦勞の多い仕事と聞くが、いまの国内事情では無くなるどころか、最低の工資で、益々内職の数を多くしている。老人や子どもも加勢して、すこしでも仕上げるの数を増やそうとつとめる。加工品は輸出に廻されるものが多く、最近の国外貿易の黒字はこれに負うところ多大である。この句の「昼の蚊」というやつは、座ってる足の指や、手先きにまでもまつわりつく、至って厄介な代物で、払えども払えどもである。

内職ならずとも身の廻りがややこしければ、ややこしいほど刺しに来る。内職でいそがしい手では、払うも叩たくも始末におえないことが想像されて、哀愁をそそる句である。

天然だネとずばりうなぎ通

(八九寸)

戦時中だったが、忘れられないのは、大雪の日に、鳥取県の東郷温泉へ一泊し、友人とこたつをばさんで食べた東郷湖のうなぎの味であった。天然うなぎは、肉が締っていて、歯ごたえがぶりっとして、うなぎ通ならずともこたえられない。その味は、養殖のうなぎとは大へんな違い。東京、大阪、名古屋の大都市は近頃、浜名湖産の養殖うなぎの天下となつてしまつたから、天然産はほとんど口にする事が出来ないが、味覚のほうは、すっかり浜名湖の養殖にならされてしまつた。しかし一口食べれば、天然と養殖はすぐ分かるのだが、うなぎ屋に言わせると、養殖もこの頃は、餌がさなぎでなくなつたから分かりますよとくる。うなぎ好きをバカにした話だが、一般人の味覚も低下したらしい。この食通は大いに好感がもてる。この句は、十五字であるが、十五字で表現を少しも損こなうところがないのは注目してよからう。「ずばり」が利いているのである。

塔は生命あるもの鳩が舞う

(古方)

塔は、五重の塔か。生命を、いのちと詠め

ば、この句も十五字であるが、破調の句も捨てたい味があることを知らされた。

鳩はどこにでも居り、寺院の参道にでもおれば可愛らしく、参詣人を愉しませるが、元来羽根のある動物だから、どこへでも飛んで行く。お寺の屋根にも軒下にもいるが、これはまた遙かな、高い五重の塔のまわりを根城にする、鳩の一群である。この鳩の一群が舞いあそぶことによって、塔に、いのちある如く観じたというのは作者の詩感である。ただなんとなく見過ごしてしまふ人もある中に、くっきりとした、こうした詩感をつかみうる人はまれであらう。作者には、ここにくきまでに、人生を諦観し得た心のゆとりがある。

市電又此処から先をチョン切られ

(与呂志)

大阪の市電が赤字であることは一種の自業自得の観もある。市電軌道内へあゝ無限に自動車、ミキサー車などの乗り入れを許してしまつては、交通が無秩序になり、あぶなくて安全地帯にも立つて居られない。つまり市電の無気力さに、市民がアイソをつかしたのである。その上車台数をへらしてしまつては、犬が尻っぽを巻いたようなもので、市民の足という誇りを自ら放棄したに等しい。しかし都市将来の交通整備の問題もあり、市電に永く乗務員生活を送っている作者は、身を切られる様な思いで、路線の縮少をながめて

いるのだらう。この句によくそれが表現されていて、同情に堪えない。

くされ縁ですとゆかたもお揃いで

(きさ子)

此の頃流行の民謡踊りの浴衣でもあらうか。浴衣もお揃いのを染めさせて、あちらこちらと踊りまくる大家の奥さんもいる。そうした仲は、よそ目にも羨ましいが、時々仲たがいにものなり、ひねくれてしまふが、またいつとはなしに仲良しになる。女心の、男には無い世界をこの句は表わしてゐて至妙である。けだし作者の円熟味であらうか。

批評家は鮎を崩して食う如し

(旅風)

批評家というものは、ときに、宝石のしずかな美しさを失わしめる様なことを言うものだ。ここでは「鮎を崩して食う如し」というが、うがち得て、妙である。

香羹の中身忘れたのも混り

(滋雀)

町噂にお悔みを述べて、ふと中身を忘れていたのに気づいて、慌ててなにがしの弔慰金を入れる人もあるかと思うと、或いは空っぽの中身のまま差し出して、知らん顔をしている。世の中というものは笑うに笑えない可笑しさがある。この句。受付をした経験でもあるのか、おかしさもあり、機知もあり面白い句だ。(おわり)



# 川柳太平記 (十)

## 富士野鞍馬

### 足利尊氏

#### 世系

足利氏は、源義家の次男義国の後裔で、義国がある事件のため関東に流されて上野に居た。そこで義重と義康との二人を生んだ。義康は下野の足利郡を領し、それで「足利」を氏としたのである。白旗を用い、紋は丸に二引であった。義重は新田郡を領し新田氏となつた。その紋は丸に一であった。

足利は酒屋新田は大神樂 (三九五)

と川柳に詠まれ、神田の内田屋という酒屋の印は丸二で、大神樂に丸一があった。また、

鳥飼は平家内田は源家也 (四〇一)

鳥飼まんじゅうの印は平家の揚羽蝶で、内田屋は足利の紋で源氏ということになる。なおその内田屋では滝の水という銘酒を売って

いたので

滝の水元白旗の一トながれ (一一五〇八)  
と足利の白旗も詠まれている。

#### 高氏・建武中興

尊氏は、嘉元三年(一一三〇五)乙巳の生まれで、はじめは高氏であった。高氏は源氏再興の責任を感じ、「源朝臣高氏」と自称し、足利郡の外に三河、上総の守護を兼ね、治部大輔であった。「日本外史」に、

「元弘元年(一一三三一)後醍醐天皇は兵を起して笠置山に拠り、北条高時を討ちたまえり。高時はすなわち高氏、直義等を遣わして、往いてこれを攻めしむ。高氏兄弟は時に外憂にあたれり。強いて起つて西せり。城陥つてすなわち返る。二年、高時は天皇を隠岐に流したてまつり、光厳帝を立

てたてまつる。すでにして帝は伯者に帰るたまい、官軍は並び起りて六波羅を攻めぬ。府帥の北条仲時、北条時益、数々戦いて利あらず。高時は、高氏及び名越高家をして赴き援けしむ。高氏は病あり、往くことを欲せず。これを強うるこゝ再三なり。高氏は大いに愠り、すなわち使者に答えて曰く「まさに不日に発すべし」と。因つて陰かにその親信に謂つて曰く「彼はもと我が家の臣隸たりき。時は遷り、勢は変り、すなわち我れを僕役するに至れり。我れは今日を以て官軍に帰し、以て我が家を興さんと欲す、如何」と、皆これに賛成せり。」とあるように、高氏の情勢判断は適確であつた。

元弘三年(一一三三三)三月二十七日、高氏は、三千余騎を率いて鎌倉を出発して京都に向つた。伯耆に行在の後醍醐帝の勅を奉じて、五月七日、京都六波羅府を攻め潰した。続いて新田義貞が鎌倉幕府を攻めて、五月二十二日陥落したので、遂に北条幕府は亡びたのである。そして帝は京都に遷られた。

鍋釜の蓋で蛇のこけおしつぶし(富四 23)  
足利の丸二を釜の蓋、新田の丸一を鍋蓋に洒落、北条の三鱗紋を蛇のこけと川柳は詠んでいる。

この功によって高氏は、從四位下左兵衛督

となり昇殿を許され、更に従三位武藏守参議に進み、天皇の諱の一字を貰って「尊氏」と改名したのである。これが「建武の中興」で翌年一月に建武と改元された。

### — 尊氏反く —

北条幕府を倒すということについては、帝も尊氏も同じであったが、それから後の理想はちがっていた。尊氏は、征夷大將軍を要請したが許されなかった。

高時の子時行が鎌倉に兵を起したので、尊氏は、建武二年（一三三五）八月、それを掃蕩して、鎌倉に入った。帝は尊氏を従二位に叙し、京都へ帰るよううながされたが、尊氏は帰らなかった。「日本外史」には、

「直義、尊氏に説いて曰く『朝廷と義貞と皆公を忌む。公の免れてここに至れるは天なり。何ぞ再び虎口に赴くことを為さんや』」と、尊氏はこれに従えり。ここに於て、自ら征夷大將軍、関東管領と称し、曰く、「帝の許したまう所なり」と。府を源頼朝の故基に開き、有功を賞し、降府を納れ、新田氏の邑の関東に在るを収め、将士に割予す。将士争いてこれに附けり。」と書かれている。歴史はこれが尊氏謀反のはじめという。尊氏三十一才であった。

ばっぱと遣ひ尊氏物にする（傍二四）と川柳は詠んでいる。「嬉遊笑覧」八則の賀

の項に、

「梅花論に、足利尊氏郷の心ひろく、物おしみのなき事をいふ処、八月朔日惡などに諸人の進物ども敷もしらずありしかども、みな人に下し賜ひしほどに云々」

とあり、  
高氏は赤はかまへ入れあげる（安五仁三）  
という句も詠まれている。

### — 將軍となる —

建武二年（一三三五）十二月、新田義貞に尊氏追討の令が下った。尊氏は、その軍を竹下、箱根、討ち破り京都へ入ったが、奥州から追ってきた北畠顯家に攻撃され、九州へ逃げたのである。

足の利く大將筑紫迄逃げる

（五四三）

尊氏は途方圖もなく逃げて行き（一二四）

尊氏は黒田の領地迄逃げる（天八十）

などと、それを川柳は詠んでいる。「黒田の領地」は筑前である。

再び、尊氏追討の令が義貞に下ったが、義貞は句当内侍という美人妻にひかれて、追撃を怠った。

濡れ事のうちに尊氏駄目をさし

（明七信一）

この間に尊氏は、光厳上皇から、逆に義貞追討の令旨をもらい、延元元年（一三三六）

四月、大軍を率いて九州を出発し京都に入り、光厳上皇の御弟光明天皇を擁立し、讓位を強請した。後醍醐帝はこれを承諾されたが、北畠親房の意見で、吉野遷都ということになり、これから南北朝対立となったのである。

鍋釜のふた南北でたたきあひ（三三三）  
なべふたと釜のふたとでいびり合（拾六）  
と義貞との対立ち川柳は詠んでいる。

田畑を荒らし高氏は代を治め（安七智一）  
という句があるように、義貞は、延元三年（一三三八）越前藤島で、足利軍に攻められて戦死したのである。「田畑」は、新田とその幹部畑六郎左衛門をいう。

そして尊氏は、延元三年（一三三八）征夷大將軍になって、京都に足利幕府を開いた。その後二十年間、南朝と北朝との戦争は絶えず、そのうちに、正平九年（一三五四）四月、南朝の重鎮、北畠親房は病死し、尊氏もそれから四年後の正平十三年（一三五八）に五十四才で死んだ。

足利二代將軍は、尊氏の子義詮がなった。義詮は、南北合流を計ったが、在職十年で、正平二十二年（一三六七）に三十八才の若さでなくなった。



①あなたのご職業は？

②日に何時間ぐらいはたらきますか？

みのりの秋ノ

勤労感謝の日ノ

はたらくよろこびを

川柳家は

どのように詠んだか……

(順不同)

元看護婦 丸 川 初 甫

亢奮のプルスそのままナースの指にふれ

水流す音も重体気づかわれ

長患いカルテがよめて不倅

本日休診二階の窓の笑い声

検便を二重三重包んで来

家庭にあって、ときどきはこれらの自句  
にありし日をしのんでおります。

医 師 山 川 阿 茶

性病の仲裁もして医者稼業

医者稼業テレビの野球背できき

昨日から悪い病気を夜起し

病氣して患者の心理わかりかけ

算術でなかつた頃に医者になり

はたらく時間は夏は九時間、冬は十時間。

最後の句のように算術でなかった頃の医者  
の家に生れ、仁術として教育されたので患者  
さんなるべく待たさないよう便利しようと  
比較的時間を長くとっております。

門前市をなす医者でもなく、雀羅を張る程  
でもありません。ゆっくり昼夜もし小唄もや  
り川柳も作ってのん気にやっております。命  
に別条のない患者さんの多い事と夜叩き起さ  
れる事はまずない科目なので儲かりませんが  
有難いと思っています。



## 同人特集

新聞工藤 甲吉

俺は蜂かよ月月火水木金金  
事件記者家へ帰ると始発が出  
人の死を三行にして記者非情  
ささやかな暮らしなれどもゴミたまる  
算術がかなしくなりぬ月給日

“小さい新聞社”の編集局次長。局長の補佐役だからなんでもやるいわばナンデモ屋である。九月二十日朝九時出社。専任の記事審査員というのが定年退社、目下欠員中というのでその分の仕事の一つふえ、ために札の上の新聞を一応、隅から隅までひっくり返して見る。ピンとこない見出しや、なんとなくスッキリしない自分の記事などを取り上げて審査報告を書くためである。そのあとハシコなど押す雑用？を処理し、夕刊の大組をみて午前中を終わる。午後は一時から県知事招集の「青少年とマスコミ」についての会議に県マスコミ倫理懇談会事務局長として出席、言論の自由を守る立ち場から青少年保護条令制定に反対を唱えて四時帰社。夕刊と他紙に目を通し、この日の分の審査報の原稿を書き、局長を残して六時退勤。超過勤務一時間、ただし手当はない。

警察 直原七面山

防犯の網にかかった署長の子  
どなられて初犯の男泥を吐き  
犯人の足が故郷を踏みたがり  
名刑事喚めきたいだけ喚めかせて  
何時の世も刑事は足で稼ぐ者

中国管区警察岡山県通信出張所。そこが私の勤務先です。

県庁の中にある警察本部にいて、専ら、本部と本庁、各管区、各府県本部との間に、事件に関する諸手配や諸情報、犯人の人相写真や容疑者の指紋、そして家出人の手配などの各種通信の送受を、盆も正月もなく、しかも昼夜を問わず年中無休で行っています。が、私は役目柄毎日午前八時半から午後五時までの八時間勤務。

無論土曜は半日。日曜は休日で祝祭日もあり、年末年始の休暇もあります。

ただ一般の勤め人と違い、非常召集などに備えて、四六時中、自分の居場所を勤務先又は家族に明らかにしておかなければならないので、この点窮屈と言えは窮屈です。





県遺族連盟 服部 十九 平

連日の夜なべを妻にいたわれ  
超勤にならぬ残業 始しやぶる  
山積の仕事晩酌など忘れ  
労務課が働き蜂を例にひき  
蟻の列矢張り日蔭の方へより

十五才で陸軍幼年学校へ這入り四十四才で  
終戦、パージ緩和で復員の仕事、五十七才で  
公職を去り、財団法人の仕事、県遺族連盟の  
事務局長。

日に何時間ぐらい働くかとはむづかしいア  
ンケート、口く答え難し。タイムレコーダー  
を捺すでなし、労基法を適用するでなし、出  
勤中も働いていない時間もあり、家にいても  
働いている時間もある。

人が働くのが働くのだとも言うし、はたの  
人をらくにさすのが働くのだとも言う、その  
当否は別として、私には働く句がない、働く  
句のないことは働いていないのだらうか、そ  
うとも思わない、免も角(1)で求められた五句  
を探すのに骨が折れ、出題者の求める意味で  
の句は五つを探し得なかった、蜂や蟻を連れ  
てきて五句の責任供出を果たす。

主婦 西 出一 栄

作業着に油をつけて社長なり  
手不足へ廻転椅子の留守多く  
物値高夫は残業して戻り  
もう一息角帽の子への汗をかき  
中絶か生むか思案の共稼ぎ

私は平凡な家庭の主婦で無職であります。  
家の職業は螺子(ネジ)製作で(店則を社則  
に変える三代目)で長男が社長として経営し  
ております。次男が専務、主人が雑役という  
役割りです。分工場や下請工場もありますが  
本社は二十数名の零細企業、でもほとんど自  
動機を使っておりますので仕事は相当にはか  
どっています。それでも社長が作業着に油を  
つけることが度々です。やむなく残業と云う  
ことになるのです。夕食夜食と私の無職が間  
に合うのはこの時です。又工場と居宅が接近  
していますため遠来のお得意様のサービスの  
指図もせねばなりません。職無き職、内助の  
功の積りでやってきましたが、昨今では嫁も  
すっかり会得してまかなくなっています。  
私は十五年來つづけてきた民生委員の仕事に  
一人でも多く幸福になつて貰えるならと専念  
致しております。私の余生は川柳と社会福祉  
に力を注ぎ度いと思っています。



## 同人特集

国鉄 山内 静水

本当の親切遮断機踏踏せず  
踏切も感心さされる朝詣り  
授業料せめてキチント子に持たせ  
貴男まで叱ると今度は子をかばい  
偉くなれもう宿題の見てやれず

国鉄の職種には二〇〇種ぐらいあって、その一つの踏切保安掛として、誇りをもって勤める事十数年、定年まであと六年、それから先きの事は考えていない。

勤務は一交代制の二十四時間であるが、労基法に依り、四時間の休養がとれる。

川柳に關する一切は主に深夜の閑散時を、無駄なく活用している。

のんきな仕事ですネと言われる時には頭に来る。あと五年で三十年、事故のない愛される踏切として終りたいと念ずるのみ。

今日の勤めも終る最後の列車、拝みたいよ  
うな尾灯はトンネルに吸い込まれていった。

市電 児島 与呂志

老人だけ市電の味を知ってくれ  
嫁はんに追い立てられたを車掌受け  
末っ子に似た子を相手にする車掌  
入学（はい）れたを運転手にまで聞かせたく  
業務命令地下へもぐれと云うてくる

十八年間のうち車掌二年半、運転手を十五年半やりました。

働き甲斐のある職場（市電）にたのしく勤め、そこで人生のうらおもてを見せてもらった感じがっぱいです。

今までに残した働く喜びの句を大事にまとめ、これからもギリギリ最後まで市電に踏みとどまり、市電に働く二十年の歴史を残し、働くよろこびの句を残したいと思っている。

一九七〇年の万国博が大坂開催と決定発表された。モグラになる時期が近づいてきたようです。

私には交通局という大きな器がある。市電のなくなった後には高速電車の駅務員として働く職場が約束されている。私の生命のかぎり、働くよろこびはつづくのです。



学校 河 井 庸 佑

参観日新教育をはがいがり  
はってまんねと言いつつのぞく親心  
参観日うちの子喋らずじまいなり  
できぬ子の丸は大きくつけてやり  
運動会わが子ばかりを追うカメラ

大阪第一師範学校を卒業し、教えられていた立場から、こんどは教える立場に変わって、現在までずっと、学校に勤務しています。

わたしたちの勤務時間は、一日に何時間としまつてはいません。始業時間は決まっていますが終わる時間が決まっていないのです。

八時三十分の始業から、五時過ぎまで、昼休みも給食指導等で殆どとられ、ゆっくり休むヒマもありません。授業が終わり後かた付けをすませ児童を帰らせて、ほっとするのが三時半、それから会議や、教材研究、事務処理等の仕事が始まるのです。

やればどこまでやってもキリのない仕事です。すから、きょうは、これぐらいでと仕事をおくようにしています。時計を見ると、いつも五時はとくに過ぎているのです。

学校とは、外から見る程、楽な、のんきなところではありません。

書 塾 久 米 奈 良 子

せがまれてマルのおまけもつけてやり  
墨の香に道あやまらぬ幸を知る  
お習字をしました汗の墨の顔  
朱の筆をおいてけんかの仲も分け  
墨の手を拭かせて二年保育なり

土曜日は、息つくまもないと云えばオーバーだけれど墨の手を洗って落ちつくのはいつも夜の十時前である。学校のお休みは、子供たちが目を覚ました時勝負でやってくる。食事の時間もおかまいなし。水曜日は出かけて行くがこれも一時から八時まで、帰宅はやはり九時という事になる。

しかし苦しい事もあるけれど老いた母の協力は私をどんなにか勇気づけ、支えにになっている事かとしみじみ思う。二十の青春を遠く押しやった長い病気が現在の生活へ方向つけたような気がする。



## 同人特集

求職中 野村 味平

長ばなししておしんこで昼にする  
米の値がどうのこうのと犬も飼ひ  
飼ひ犬を放せばワイフに泣きつかれ  
還暦へピンとは来ない若さなり  
これからがひと踏張りの気力見せ

就職または就労、内職又は手伝い、内職収入または手伝いの謝礼を得たか、いずれもせないと「丸」で囲み、当所以外で求職活動をしたか、「して居ります」扶養親族は「女房一人」当所から適した仕事の紹介があれば、「応じられる」こう書き込んで、健康状態が少々悪いので軽い事務的なことなればと口頭で伝えたら、医師の診断書を一通取られた。こうして一週間に一ぺん失業保険金を貰いに、職安の窓口に立たされる境涯に追い込まれたが、閑人には、閑がないの譬話の通りの生活をしております。

纖維輸入 傍島 静馬

おれとかが倒産したい昨日今日  
事業欲安眠出来ぬほど揺るげ  
商売不振おやじ現役復帰する  
定退に隠居せよとはいわぬなり  
よそ目には日日好日の楽隠居

不況風の吹く昨今各種の業界に相次いで倒産者の出ることは、誠に歎かわしいことと想います。私は現在小規模ながら、戦前永らく手掛けていた纖維製品の輸入に携わっております。勿論老令ではあり、時節柄余り欲張ったことはしておりません。幸い息子達も一応成人して独立しておりますので、此点では恵まれております。しかしながらこれらの息子達に依存ばかりもしておれませんので、日夜老骨に鞭打って大いに頑張っております。とはいふもののやっぱり年令には勝てず、思うように体が動きません。でも幸いなことに比較的時間に縛られることがありませんので、こつこつと気永に仕事を続けております。





書店 金井 文秋

本屋でよろしいな、本はなんぼでも読めるし、坐ってるだけで、お客さんはきてくれるし、お客さん達はよくこんな事を云うが、とんでもない、配達から返品の整理、問屋行きと閑な時間を利用する仕事はたくさんある。店番をしている時間も、万引の見張りや、客の相手と、朝九時から晩の十一時まで、ほとんど自分の時間がないのが本屋の実体だ。そんな訳だから、作句の時間も店を閉めてから三十分位しかない。

しかし川柳の材料は営業中に得られるのも楽しいものである。

立読みの子におっさんはけちくさい  
立読みの子におっさんはけちくさい  
立読みの効用もあるが、悩まされる方がはるかに多い。

下積の方から雑誌売れて行き  
二三冊積んだ雑誌は底が売れ  
一冊きりの雑誌を汚な買って買  
値が同じならきれいなを買いたいのはお客の心理だが、そのくせ汚ない札を選つて出すのだから、いい気なもんだ。

旅館 橘 高 薫 風

幕末、明治の初期には中之島の今の阪大医学部辺りを中心を広島藩をはじめ米どこの諸藩の蔵屋敷が立ち並んでいた。そして今でいう出張所員であるところの藩士が、米商人をはじめとする実力者町人を招待したのが曽根崎新地。現今の色街は見るかげもなく、キヤバレー、ナイトクラブ、バー、スタンド等がそれにとつて代り、寿司屋、レストラン、喫茶店、旅館が目白押しに存在していて、それらは大小に拘らず、殆んど梅田、中之島界限の商社の社用族の利用するところとなっている。大阪の北はいわば社用族の伝統的土地柄である訳だ。昭和二十年代の後半、社用華やかなりし頃に、

ああ社用酒地肉林のすばらしさ

社用から遊びの癖がつきはじめ

水 里 夏 六

などの佳句が生れたが、昨今の社用族は緊縮財政のあふりで往年の派手な趣はない。併し「ご同役、わが社の株の値がまたまた思わしく御座らぬのう。」

「左様で御座るな。一つ××証券の副社長を招待致さねば相成らぬかな。」

というような次第で、今夜も盃と牌が入り乱れることになるのである。

深夜食旨い漬け物絶やさずに

薫 風



## 同人特集

### 会社役員 若本多久志

ストやれる羨しさの廻り椅子  
ふと気付く重役タイプへ自己嫌悪  
資金繰り伊丹から飛ぶ気のあせり  
解雇する稟議へ重い判を押し  
ボーナスを渡す訓示は胸を張り

資本金五千万円、従業員百五十人という小企業だが重役は重役、職業区分に従えば「会社役員」ということになる。  
だが私はこの重役が嫌でたまらない。何故ならば、賃上要求も、ストライキもやれないからである。  
不況と金融難にあえぎながら、一日猶に、十時間以上の労働、日曜祭日の休みさえ思うにまかせない、実に小企業の重役ほどみじめな者はあるまい。  
只僅に救いとなることは、優秀な社員に表彰状を渡す時の喜びと、ボーナスを渡す時の訓示がすばらしくいい気持だ。  
うっかりと上役らしい声になり

### 建築 清水白柳

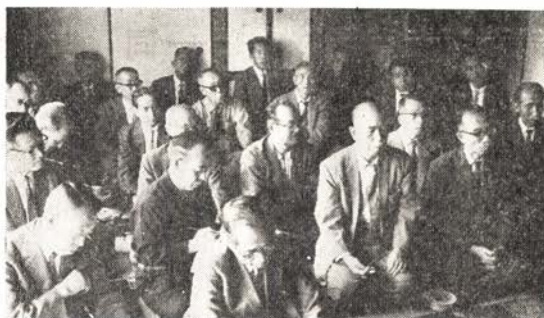
一寸した血はなめて置く大工の手  
ベル押せば大工が留守を言いに出る  
落ちそうなとこで昼寝をする大工  
地団太を踏んで大工は板を替え  
打ちにくいとこはぎつちよで打つ大工

大工という仕事は、新築となると、地取りから建前、仕上げて入居の際の棚釣りまで、つまり最初から最後まで用のある仕事で、思ったより手間のかかるものです。若い人ですと動いてさえ居ればそれで済みますが、私のように年輩になるとそれだけではすまないでいろいろの段取りもしなければなりません。現場での時間は皆と同じで朝八時頃から夕方五時すぎになるまで働きます。そして翌日の段取りをしたり、他の業種との打合せなどで夜までかかることが殆んどです。しかし最近の若い職人は店の改造やちょっとした修繕などの汚れやすい仕事を嫌って因ります。そうなる私のような老人はどうしてもそうした仕事をやらねばならないようになってきますので、この頃はそうした事をやっています。重な仕事は息子がやってくれるので安心して老人仕事に精を出しているという次第です。

# 川柳塔社創立同人総会

「同人規約・川柳塔の憲法成る」

― 会場 川柳塔本社楼上一 ―



なものが感じられた。

正面に、

「仮議長の選定」

「規約審議」

「役員選挙」

「理事長のあいさつ」

「協議懇談」

と書かれ、西尾梨氏の司会で記念すべき同人総会の幕があく。

川柳塔社創立同人総会が十月三日午後二時から南区三休橋の本社楼上で開かれた。

同人総会の通知を百七十氏に出したが、当日までに着便したものが百五十三通（総会後十数通着便）そのうち委任出席が百二十四名、本人出席が二十九名。

秋空いよいよ晴れて、諸氏の顔も決意のなかに、なにかさわやか

ばれた。菊沢小松園、浜田久米雄、後藤梅志、福島鉄児、金井文秋の五氏。

結果は左の通りにきまった。

理事長・主幹

中島生々庵。

副理事長

若本多久志、松江梅里。

参事 (以下順不同)

市場役食子、浜田久米雄、小西無鬼、後藤梅志、尼緑之助、北川春果、伊藤茶仏、橋本緑雨、工藤甲吉。

常任理事

菊沢小松園、正本水客、吉田圭井堂、傍島静馬、川村好郎、戸田古方、不二田一三夫、河相すゝむ、橋高薫風、大坂形水、清水白柳、

西田柳宏子、河井庸佑、西尾梨、小川恒明。

理事

山川阿茶、八木摩天郎、樋口舟遊、児島与呂志、西いわを、金井文秋、辻圭水、本多柳志、西出一栄、辻白溪子、菊田いさむ、水谷竹莊、高橋操子、真原七面山、山内静水、満場一致で就任された新理事長中島生々庵氏は、亡師の遺志を受け継いだ以上は一生懸命にやると力強い言葉で就任のあいさつをされた。

役員に選ばれた諸氏のなかからさらにそれぞれのポジションがきまった。

事業部 部長・松江梅里。辻白溪子、八木

摩天郎、小川恒明、吉田圭井堂、  
傍島静馬、大坂形水。

同人部

部長・川村好郎。真原七面山、辻  
圭水。

会計部

部長・若本多久志。金井文秋、菊  
沢小松園。

渉外部

部長・西尾葉。川村好郎、若本多  
久志、菊沢小松園、西いわを、河  
相すゑむ、戸田古方。

編集部

部長・清水白柳。不二田一三夫、

橋高薫風、河井庸佑、金井文秋、

戸田古方、児島与呂志、浅川八郎

句会部

部長・菊田いさむ。西田柳宏子、

橋高薫風、児島与呂志、本多清人

樋口舟遊、河井庸佑、西出一栄、

山川阿茶、高橋操子。

このように陣容はととのった。  
はじめての同人制ではあるが、  
「やるぞ」の意気が諸氏の紅

麻生 葎 乃

さんど笠あと振返えることもなく

七七日志賀高原にりんどうが咲く

朝あり夕あり草におく露にも

病床にて（二句）

不完全燃焼となりぬ細胞のひとつひとつが

事務整理

書類焼く火は落城の火とも見ゆ

潮した顔にみなぎっていた。いま  
までは路郎先生一家になにもか  
もやっていたいたが、きょうか  
らは送本の封筒書きから郵便局へ  
の発送まで、われわれ同人の手で  
やっていたいかならないのだ。他  
の柳社ではとくくのむかしにこの  
システムで進んでいたのだが、い  
よいよおそまきながら、すべての  
運営をわれわれの手でやることに  
なった晴れの門出がきょうなので  
ある。

同人諸氏の責任は大きい。川柳

塔社の行く手にはいろいろな難関  
もあるが、それをみんなで突破  
していかなばならない。川柳塔社  
は一人のものではない。みんなの  
ものである。わが社が発展するも  
しないも、みな一人一人の同人の  
肩にかかっているのである。光輝  
ある「川柳雑誌」の名を汚がして  
はならない。前進、ただ前進ある  
のみである。そして一人一人が光  
榮の旗手として先頭に立つ意気な  
持つことである。

和の結果！これが原動力となる  
のだ。一人の独裁者はゆるさな  
いのだ。それには同人一人一人の

力を結集するのである。ここに同  
人制の意義と栄光があるのだ。

出席者―大坂形水、金井文秋、

吉田圭井堂、傍島静馬、正本水客

浜田久米雄、後藤梅志、戸田古方

西尾葉、橋高薫風、河相すゑむ、

清水白柳、山田季賛、辻白溪子、

川柳塔創刊号

売り切れました

阿萬萬的、高崎雄声、川村好郎、  
福島鉄児、北川春果、菊沢小松園  
若本多久志、不二田一三夫、中島  
生々庵、松江梅里、浅川八郎、樋  
口舟遊、太田良子、藤村ベ女、高  
賢亜詞諸氏。

★

この日、特別出席された高賢亜  
詞氏は盲人となられはしたが、氏  
独自の弁舌で故麻生路郎先生の偉  
大であったことを、とうとうとの  
べられ清場に大きな感激を与えら  
れた。

カットの写真は当日出席の諸  
氏。



# スランブ

・戸田古方・

スランブのもとはお嫁が欲しいです

古方

作句力の純った言訳けがいたくなる時期それが初級入門期から中級に進む境でないかと思えます。

入門早々というものはめくら減法力こぶの入るもので、誘われて出掛けた川柳の大会で抜けたりすることも珍しくありません。抜けた、抜けたと鼻高々、川柳の虫のように作句に励んだものでした。一本調子にいくものと思っていたのが、そんなことはそういつまでも続かず、スランブに入ります。

ここで、あかんとやめてしまえばそれでいい。いささかでも抵抗を感じ、苦痛を感じる人だけが次に進むことができるのです。そこで、スランブについて考えていることにします。

スランブとはエネルギーを出しきってしま

ったり、いろいろの事情のためスムーズに出てこなくなったためにおこる中だるみ、低調不振であります。生理的にも一服したくなる状態です。

そうとは気付かず、まわりのうごいているのにつられて、だらだら続けていますので、今までのように抜けなくなり、よく全没の憂き目にもあいます。これが入門の時なら、何くそと元氣も出ますが、今日となつては、ひとに全没の顔でも見られているようで、いやなものです。

とつき易いように見えても川柳の底は深いのです。その底の深さに気づきはじめるかどうかが問題です。

当然、ここで転換の必要にせまられます。この転換がスランブ乗切りの方法なのです。自然に無理をせず回復を待つか、努力して抜け出そうと試みるかです。

ある時は自然に、また、あるときは努力をと繰返すのが普通で、これから先きはこの二つのもつれ合いの連続です。

入門当日、路郎先生より「川柳は人間陶冶の詩だ。」と教えられました。そして、川柳作品を裏づけするものはその人自身の幅であり、厚味であるとおききました。私はいく度びか川柳を離れそうになりながら、先生のお言葉に勇気づけられ、エネルギーの蓄積をつづけたのでした。

「一粒の麦は死なず。」読んでいる本から新聞から、雑誌から、ラジオ、テレビから、また、身辺の出来事から、珠玉のような刺激を受け、作句のテーマを見つけたこともありました。

そして、句が、また、出来はじめなのです。が、かならず氣に入つた句ができるとは限りません。また、出来たものを全部発表する氣にもなれません。ずい分沢山の句を見て来ているので眼が肥えて来ているのです。この眼の肥えたということが、作句の手をにぶらせ、発表をためらわせ、それが、スランブをよび起したのだとも氣がつくのでした。鑑賞眼が深まったともいえるでしょう。

話は変わりますが、人間生きている以上、喜びも悲しみもない人はありますまい。もし、その感じ方が薄いとすると、余程ケツコウなお人か、生きることの身の入れ方の足らぬ

そんな時、句会にいった題詠をする機会もあるでしょう。まだまだ、そう拔けないかもしれない。題詠は作句の基礎練習になりますから我慢していたしましょう。

抜はにくい原因の一つに、個性が強く現われはじめたことがあげられます。しかし、個性が強いからだけで没になるものではありません。個性の強い句であっても、いいものはいいし、わるいものはわるいのです。句会の選者はいい句を見落すことはまずありません。どこがわるいのか、どこが足りないのか、推敲を繰に、作句法を横に十分に自分の句を練ることです。そうした反省はあなたの句の勉強の外に、人生への勉強もさせてくれるも

私はよく童画、凡画（理画）、聖画ということで人間発達の順序をお話いたします。中級とはその童画から凡画へ移ったばかりのところでは、

子供の自由画は新鮮でヒチビチしています。

す。天才のひらめきも見つけ出されます。子供は描きたくてあんなイビツな絵を描いているのではありません。自分ではもっとちゃんとした絵が描きたいのですが、描けないのです。大人はコードモの絵に大人ではやれない生命の躍動を見つけて感心するのです。川柳人門時代は新しく見つけた川柳の道に、もっているだけのエネルギーをそそぎこみます。川

柳にはあまりむづかしい約束がないものですから、案外、新鮮な佳句ともなるものです。しかし、榮菴の補給を怠りますと、そのエネルギーは枯れてしまうのです。

コド土が学校に入り、小学校、中学校と進みますと、描く絵もだんだん尋常なものになって行きます。最近絵も変りましたので、昔ほど、はじめからデッサンなんかやましくいなくなりましたが、めいめいで立体感を勉強したり、構図を考えたり、画論を読んだりするでしょう。芸術解剖学に関心をもつ人も出てくるかもしれません。そうすると、自由画にあった歪は直ってきますが、おもしろ味は姿を消してくるのです。凡画とか、理画とかいいますのはこの時期のことです、そうした常識の枠の内でのことがはこばれてゆきます。自分を表現することに苦しみ出すのも、川柳中級初期とよく似ています。

この凡画時代は絵を描く人にとっても、川柳作家にとっても長く、長くつづくもので、おいそれと終るものではありません。柳歴の長さだけできまるものではなく、私などはまだまだこのなかでうろうろしているのです、自分を伸ばすということは、自分に打克つということです。人間が出来上っていくにつれて、川柳にもみがきがかかってくるものですよ。

とくに正しく伸びてゆくために大切なこと

# 雅号ぶっちゃんけばなし (1)

タガキ・ホウダイ



・田垣方大・

たがき・ほうだい

方田とは四角と丸のことであり、方とは四角を意味する、私の顔はエラが張っていて将棋盤のようであり、姓の田垣も角型で方にびたりといえる、また方正とは「正しいこと」なので、大らかな人物になろうと思って「方大」と号したので、ところが、こんな真面目な意味のあることも、友人間では本当にしてくれず、出放題から進化したのだからと茶化されてしまうのは残念千万です、なくなられた豆秋さんは方大から砲合を連想して私がかい男のように思っておられたそうで、初対面の時、僕の思っていたとおりの男性だったと、大笑いされた懐かしい思い出があります。

・会社員（技術系）・五四歳

は昔からよくいわれる三多の実行です。即ち多読、多考、多作をすることです。要は川柳への、いや、人生への限らない情熱を燃しつづけることです。

聖画というのは、富岡鉄斎画伯の晩年の作に見るような、何もかも心得えた上で童画のような巧まない自然に帰ることをいうのです。が、川柳するものも、枯れた句や怪味の句のよさがわかりかけますと、早くそんな句を作りたいくなるものです。これらはしかし作って出来るものではなく、その人の人生からにじみ出てくるものであります。いきをはき出すようにはき出されるものです。上位入選

の句を見ていますと、いつもそうした作意以上のものを感じます。

路郎先生の最後の句は

雲の峯という手もありさらばさらばです

雲の峯は今こそわれわれの目標です。この句は穿ちの句でもなければ、感じの句でもありません。雲の峯はより遠く、より高いところにあります。その雲の峯は川柳の門を叩いた人にはすでに見えているのです。一度みえた雲の峯はスランブがどんなにしょくく襲いかかるうが、あなたの脳裏に焼ついて、あなたに希望を失わせるようなことはないでしょう。

川柳の門の入口からもちに雲の峯は見えています。しかし、それぞれの見方で見えているのでありまして、雲の峯の全体を見極めることはできわめてむづかしいのです。近づいたからといって、よく見えるとは限りません。それはちょうど富士山のようなもので、富士山へ登った人なら誰でも知っているように、頂上に立って見ても、何が富士山かがつかめないのと同じです。

雲の峯のあるところ、そこに目ざす川柳の絶対境があり、川柳塔をそこに立てるので

ともあれ、われわれの雲の峯は路郎先生が尊いご一生の最後に示してくださった雲の峯です。先生ご自身もその雲の峯を目ざしていられたのかもしれませんが。初代川柳柄井八右衛門翁が

木枯やあとて芽を吹け川柳

と「川柳」を残してくださいましたように、路郎先生は「弟子に孫弟子ひ孫弟子」に「雲の峯」を残してくださいました。最後の垂訓であり、涅槃経に接する心地です。

スランブの時をいくつも、いくつも越えた所にある雲の峯です。

精根をかたわけて、しかし足とはじくくり蝸牛のように、一步、一步を大切にしながら進みましょう。

(一九六五・八・三〇)



002は

## 反省の番号

不二田 一三夫

創刊号の採点はだいたい甘いもので、編集部はそれをウノミによるこぶところか、逆に反省をしているのです。

まず第一ページの「今月のことば」に四肢五臓六腑とするのを五臓五腑と誤植するなど「忙しがしすぎた」ではすまされないし、

あとはもうこわくなって、ついに本になってからは読む元気をうしなっていました。二十五日に本が出来たのに、送本完了までに、一週間も費やしたことはまことに不手ぎわでした。

一部の旧不朽会員の方々や、一般読者の方々にも「川柳塔」創刊のごあいさつなど連絡ができなかったことも申しわけないことで、けっきょくこれらの方々の送本が遅れたわけでした。早いところでは二十七日に本誌を手にされ、早速電話などで、「創刊号おめでとう」

と、お祝いのことばをたまわったのに、一

## 雅号ぶっちゃけばなし(2)

フクイ・ヤメイロ



・福井 野迷路・

ふくい・やめいろ

最初の手ほどきを生々庵師に受く  
医師会誌に何べん投げしても全没、  
せめて一句位は抜いて呉れたらどうやと投書したら「  
せめて箸にか、棒にか、どちらでもよいから引っかかるものを作れ」ときた。爾来強引にきたえられて箸にひっかかる程度にまで進み、やっと路郎門下に加えられる。六十の手習いとはよく聞くが七十の手習いはあまり聞かぬ、どうしても抜いて呉れねば「やめろ」と軽い気持ちで野迷路と称す。爾来故路郎師、霞乃師、生々庵師、白柳師、梅里師阿茶師等からたまによい句を作ると盛んに持ち上げられる、それを又本気にして喜び以て今日にいたる。

・医師・ 七十四歳

部の方にこうした迷惑をかけたことを重ねておわびいたします。

いよいよ第二号から「同人制」がレールにのりましたから、これからはうまくやっていくことと思います。

改題で第三種郵便物の認可が簡単にとれると思っていたのに、いろいろな事情のため、これもダメでしたが、送料は六円だけいただいてあとは本社負担ということにしました。

「残ってもいいから、三百や五百は余分に雑誌を刷っておくように」と、云われていたのに、定価以上の雑誌になってしまったため気が弱くなり「川柳雑誌」から講読者をひきつぐだけの部数を刷ったところ、十月三日の同人総会の日には、ほとんど売切れとなりました。本が出来て十日もたないアツというまの売切れで、八日の句会用に二十部残すのに苦労しました。うれしい悲鳴という古いことばもこんな時には生きてきます。

同人諸氏がよその句会で売ってくださったことが、このうれしい異変をよんだのです。この方面にかぎり、同人制の威力を発揮したことは前途に明るい希望をもたせてくれました。書店へ一冊も持っていけなかったため、宣伝も一歩おくれたようです。2号からは採点もきびしくなることでしょうから、みんなでガン張って「003は栄光の番号」にしたものです。



# 未来へ続く抒情

——薰風句集「檸檬」に寄せて——

早 川 清 生

路郎師の告別式場で、薰風は例によって面倒な仕事を一手に引き受け、人目につかないところで、葬儀が滞りなく行なわれるよう奔走していたが、モーニングの下のワイシャツを指さして、これは路郎先生が着ておられたものだと言った。その薰風からも感じたが、いつも彼が発散している知的な雰囲気や社会的な誠実さ、あるいは可否両面の衝動は彼の川柳の母胎となり、彼のみがもつ純粹さと相俟って彼の詩を育てている。

薰風の第二句集「檸檬」が上梓された。川柳生活十年の中から厳選された珠玉の句集たるを失なわない。事実上の発刊が路郎師追悼句会の日であり、かつ水府氏の没せられた日でもあるのが偶然だが示唆に富んでいる。

私は生来模倣や追従が大嫌いだから、類句の多い諸柳誌の中で「檸檬」を一読して、まことにさわやかな印象をうけた。さわやかといっても時節柄「檸檬」が単に銷夏の詠物にとどまるものではなく、お互い川柳人にとっ

て何かを考えさせるものであり、彼の常に前進しようとする姿勢は、味読するものに強い影響を与えずにはおかないであろう。

最初の句集「有情」において、すばらしい抒情で我々を圧倒した彼は、ある場合抒情作家などという名が却って負担となり、呪縛となつて彼を制約したことを思うが、「檸檬」では期待どおりその重みに堪えて、みごとな成長をみせている。

人生譜柳は日々の風を見す

子の寝顔汝が父母多くあやまてり

元旦やわけて四十と云う齡は

などどの頁を開いても流れる深い人間愛と寂寥感はこの句集の主題部を構成して、清らかな旋律を運んでゆく。抒情の甘さに溺れることなく、いつの場合でも人生の真実を見失うまいとする態度こそ薰風の真骨頂であろう。感覚の繊細さは彼の特性であり、何人の追隨をも許さない独壇場であるが

银杏散る風の祭りを見ることし

愛恋の錆は何色桜桃忌

降る雪に貪しきものが先ず隠れ

資質のいまだ潤れざるを知るのである。句業十年の集積というだけに「有情」に見たなつかしい句も若干採録されているが

都会の夜セロリは母の香に似たり

牛小屋に月光美しき浪費

などのすぐれた感性のほとばしりは、この句集を編むにあたつても置き去りにしかねたのであろう。しかし現在の薰風は極言すれば少女趣味ともいえるこの域からすでに脱却してさらに奥行ある主観の色濃く境地に達しているのである。ある意味では夢を捨てて現実在即こうとしているともいえるのであつて、明日の薰風こそ刮目して見るべきであらう。

私など川柳の大河でどんな餌にも食いつく鯨のごときものだが、彼は清冽な苔にしか触れぬ鮎の潔癖さと貴族性を身につけている。従つて社会吟的なものは

政治家の顔を自然は相容れず

將軍に枕して寝る世が久し

きわめて僅かであるし、情緒の世界に遊んで

つり合わぬ恋にかじかむ女の手

乱れ髪式部の世より恋は憂き

とさびしいほど観念的であり数も少ない。なお後の句はいわば彼の処女作として記念碑的な役目をもつ作品である。

この句集を編集した経緯は知らないが、このことは逆にいえば句集のカラーを統一しようとした努力に基づくものとも考えられる。とすればこれだけの句数と密度を同じ傾向の句によって維持しようとするれば、句集の背後におびただしい作品の群がなければならぬ。僅々三年の間に二つの句集をものし得たのも、川柳に打ちこむ平素の情熱と、労を惜しまぬ行動半径の広さによるもので、改めて敬意を表する。

人ひとりわが春愁の洞に入る

月見草恋も滴るものうち

春風の帷に吹くとき懸想かな

彼は言葉の魔術師である。彼が口にすると、どの言葉も新鮮なひびきと意味をもち、おとぎ話の少女がしてみせたように黄金となつてころがり出る。もっとも時として言葉がきらびやかに過ぎたり、甘い妥協をみせるほへえましきもある。鍊金術は百発百中とはいかない。

彼が俳句とどの程度の接触をもつのか、句に季語を用いた例が多い。

煮凍りよ少年の日は貪しかりき

芒原に実るものなし月一顆

このほか「鬼灯」「草餅」「掃苔」等の語や「や」「かな」の切字、追悼句にみる「葬送る」の措辞、さらに二者衝突の手法など巧みに採り入れている。しかし俳句の世界も廣大

なこと故、知らずしてその亜流に墮すことのないように望む。

「視野無限」とは路郎師がこの句集の序として饒けせられた言葉である。しかし彼の場合は素材を多く自分の身辺から選んでいるので句の内面的なひろがりとはともかく、視野は必ずしも無限とはいかないようだ。そのため家族を詠んだ句に佳吟が多いが、これが即ち欠陥だとは言えないだろう。

極月やわが父の死を立語

魚屋の魚いろいろ妻が病み

蝶の妍極まれはわが誕生日

薫風が伝統川柳の中での詩性の探求をめざし、あえて革新川柳への懷疑を公言するのはそれなりに立派だと思ふ。しかし「檸檬」の中にやや甘美な感傷や通俗的な作品が散見されるのは、作者が余人なら十分通用し得ても彼のためにはとらない。

君おもう熱もまじれる風邪の熱

水の精覚め森の精まだ眠し

おたやんは大阪弁で喋りそう

また前書付の句が多いのも彼の特徴で、「有情」に比して格段の進歩を示したとは言えないが、香林忌・一茶忌などの忌日を詠ったものにまことに巧妙なものが多かった。それよりないない作品の中に捨てきれないものがあるのは、いかにも薫風らしい。

文机に葉根譚を伏せて留守

除夜過ぎて机上湧きくる泉あり

生まれし時灯ありき死に行く時灯あらん  
なお句集の表紙は彼も満足のようにあり、非常に瀟洒である。一頁に一句ないし三句を配したぜいたくな組み方も「檸檬」にふさわしい。

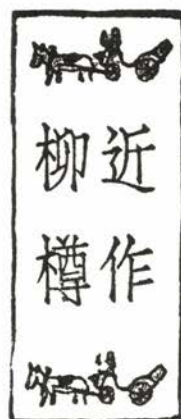
以上思いつくままに述べたが、短時間にこの小文をまとめる必要から読み返して意を尽くさないところが多く、著者にも無用の迷惑をかけた点の多々あることをお詫びする。しかし柳界にとって貴重な個性をもつ薫風が、新しい川柳を担うべき一人として、路郎師の逝去という試練にめげず、第二句集の刊行を転機にさらにめざましい飛躍をとげられることを心から祈る。

黄銅六角ボルトナット

及び特殊換物全般

西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地  
TEL 06 3452-114  
夜間 06 44008



西尾 栞選  
松江 梅里選

高知県 山川勝子

ナイターのテレビ婆ちゃんだけが寝る  
葱貰いすぎ焼にする此の暑さ  
生字引重宝がられ邪魔がられ

指名手配と間違えられたサン格拉斯  
誤字当て字それでも嬉しい子の便り  
座るにも立つにも古稀のドッコイショ  
水ききん有難かつた邪魔な井戸  
酒飲みに長所が有った力持ち

大阪市 大江俊夫

市民税だけが市民としての価値  
ステコで歩けぬ避暑地憧れる  
延びたとはいうが生命の安いこと  
頬よせてねぎらうだけの妻でよし  
一杯の酒で変る人生観もあり  
風速50マンシヨンジャズをきいている  
本能は憐れ深夜をまだ歩き

竹原市 三宅紀世美

呼べば直ぐ返事もかえる新世帯  
今日からは俺が秋ぞと立つ案山子  
百姓へ夕日ストンと山に落ち  
祈りとも愚痴とも思う墓参り  
新入社もう定年へ指を折り  
内職のペースが狂う妻の客  
好き嫌い同じ我が子の仕草にも

鳥取県 鈴木村諷子

ビールの口金めしに炊くほど貯つたり  
便所にも連れだつてゆく仲のよさ  
嫁にいびられた同志でうまが合い  
遺言を書くふんざりもつかず老い  
灌水車早起順にまいはじめ  
退院は哀しや妻にまた敷かれ

大阪市 和田痴亭

四面楚敷六十過ぎての口が過ぎ

折角に貰うたメロン他所へやり

ゆきつけの質屋の奥から琴がもれ

おちおちと洗えぬ湯銭値上論

課長補佐なぞと同窓会のうそ

パパさんと呼んでもらえば高うつき

大阪府 島 田 雄 峰

自己宣伝ああ悲しきはサラリーマン

ツタイ歩きもう親の手を邪魔にして

年頃がおつて忘れぬPR

下請の下まだその下で五人喰い

生きて行くうそへ涙も流れて来

アメリカ 斎 藤 流 路

手から眼から若さが逃げんとす

カクテルで流せぬものと知りし夜

風で倒れた花にも蝶や蜂

訴をきいて呉れない天と知り

一刀両断玉葱のくすれゆき

愛媛県 横 田 放 人

入口で借りる口実復唱し

子に託す夢がだんだん小さくなり

かんじんなどこは次席にしやべらせる

同級会出世したのが遅う来る

自慢しに来たのもあつた見舞客

石川県 塚 本 健 二

逆転サヨナラそんな夢を持つ私

寄附帳へちよぼちよぼのを捜し

感違いたのかあととは唄になり

ホステスは営業用の年で塗り

禁酒宣言妻ふふんと笑い

大阪府 氏 林 洋 敏

胃潰瘍ですと名医は嘘に慣れ

行水の良さを団地の子は知らず

仲人にだまされ金婚式迎え

予備校の隅でシヨツクな二十才の日

大阪府 藤 富 淀 月

ゴム長の要らぬ道路になつた地価

着だけ持つて来いよと友送り

着だおれの見本にされる京の伯母

共稼ぎ幸か不幸が子が出来ず

七尾市 松 高 秀 峰

親の目の甘さが知れた少年A

錠前の音を信じて共稼ぎ

絶景へハンドルの手必死なり

遠距離の電話へ替る替る出る

河内長野市 森 本 黒 天 子

空席へ娘ざかりが埋めて呉れ

老人の話し相手は孫と定め

五十年ののを自慢のテープにし

面目はあらたに一から出直す気

大阪府 藤 井 玄 武 洞

百合赤し生家への坂片陰り

背信へ夕顔ほのとからみあい

杜つつむ夕焼けに鶴ひとり者

真珠にはとても縁なし若芽刈り

竹原市 小 島 和 幸

お好み屋まで来て女よくしやべり



円満に解決何か物足らず

鐘太鼓派手に鳴らして負けている

ラブレターすきスキ好きと書いてなし

羽曳野市 今井 岳 太

海へ山へ病む身は嫉妬するばかり

怪談を聞く表情にある凄味

純粹な血が仇になり犬の恋

別れ道愛の仕草がまだできず

仙台市 平野 光 道

鍋こげる匂いで妻の愚痴終わる

テレビ子を叱れば勉強部屋ねだる

プレハブの住宅台風避けて過ぎ

出世型歌わず歌わせ拍手する

伊丹市 小川 静 観 堂

からむのが女房とあつては阿呆らしい

いざ食うとなると入歯の目刺かな

自転車は盗まれるのに都合よく

愛媛県 澄 本 満 子

全身であなたの愛を打診する

万引を生理のせいにして弁解

亡き人に操を誓うに妖しすぎ

尼崎市 岡 本 昭 三

日本地図妻にも夢があるプラン

故里もダンブが走る砂ほこり

日やといに出る弁当をきつう詰め

大阪市 古川 静 波

名月へ保守革新の父子たり

病人の視姦は許す看護服

オールドミスだんだん造花に似てきたり

青森県 岩 淵 一 星

夜に強く朝には弱い子の育ち

シャボン玉親の期待に似てこわれ

長男と仕切りがいらぬ酒の味

口上手股肱の臣に採り難し

円満な人がら故に頼りなく

羽咋市 三宅 ろ 亭

伊香保にて

酔客も寝たか溪の流る音

布施市 吉 岡 嘉 子

二十本ほどの毛に理容士ハサミ持ち

ヒモつきの国 ヒモに色ある武器を持ち

父もまた ご先祖さまへ仲間入り

島根県 竹 内 李 朋

お互いに善意を主張する砲火

首だけになり文楽の楽屋裏

石地藏今日も笑顔でおわします

松江市 門 脇 無 風

火災保険つけた建物だけ残り

幽霊も出番待つ間のあぐらかき

消灯の後もベッドで句をひねり

玉島市 井 上 旭 峰

宝物殿修学児童を疲れさせ

金談になれば冷たくなる言葉

あの話龍頭蛇尾になつて消え

大阪市 田 くり 坊

煙突を的に行けば立ちならび

蠅よたかるな俺はまだ生きてゐる

大洲市 堀内 曉風

入口でちゃんと解つた声の主

耳打ちへ反対側の目が光り

八尾市 宇佐見 彰大

ホステスに年寄りもてるせちがらさ

夕方は安い市電が早く着き 松江市 岡崎 祥月

山陰の銘菓手つきは裏千家

石蹴つていらだつ心慰める

大阪市 佐藤 勝利

見舞状書いてる方も入院中

戦争を知らぬ私も平和党

大阪市 森本 良夫

受取つた名刺へ眼鏡さがす齡

ふるさとが人でふくれる日のお盆

大和郡山市 中内 孚彦

バイトの金を母はもつたいながら

血圧や心臓よりもやせぐすり

倉敷市 水粉 千翁

菓子箱へお見知りおきの顔を添え

捨て石の値打ちを敵が口惜しがり

大阪市 西本 保夫

はつきりと断りやすい電話口

ウィットに富む幹事で平社員

神戸市 吉田 隆史

座布団で座敷を掃いた不意の客

アパートで初孫抱いて父母の負け

沈む陽を蛙合唱して送り

長病みのそれから情と云う字知り

和歌山県 山本 定男

対岸の闇へ花火の恋が浮き

麦飯は食わぬがガンを知らず近き

香川県 三井 酔夢

縁うすき葬儀怪口たたき合い

平凡に生きる幸せやつと知り 茨木市 高木 繁太郎

奥比叡俗化禽鳥まで四散

大阪市 板井 兎裸

路郎先生辞世によせて

くずれたるあとより次の雲の峰

大阪市 坂川 有子

妥協とは哀しき心もつことば

大阪市 脇通 隆

歯車がくるつたような母の留守

布施市 伊賀 鈴

愛情を二つにわける憎らしさ

大阪市 吉田 ひろ

夏雲のむくむく亡父の顔になり

大阪市 園 むらさき

夜の夫をあからさまに書いたのが入選

八代市 永松 道雄

しばみゆく身に重労働の孫の守り

徳島市 米田 美佐

おばあちゃんもテレビでおばえた流行語

# 教室句作

研究題「善意」



清水白柳

十月一日から始まった赤い羽根運動は今年で二十回目になるそうで、善意の灯が年々積み重ねられてゆくことは何としても、うれしいことである。

善意の差つけるバッジと赤い羽根 滋 雀  
その善意も十円で赤い羽根をつけて歩いているのはほほえましいが、バッジをつけている人は何か馴染めない感じがする。別に特権意識を誇示しているわけではないのだが、いっそ全部バッジにしたらいいのに思う。この句はその僅かな金額の差を羽根とバッジに分けた当事者に反省をうながしているのである。上五文字を善意の差でなくて善意に差とする方がよいのではないかと思った。

待合の善意の傘の油紙匂う

一年もたために善意の傘が消え

又貸しにされて貸し傘いためられ

雨傘の善意が路地で忘れられ

俄雨善意の傘へ涙ぐみ

俄雨学生服を招き入れ

小さな善意黙って傘をさしかける

雄 護 士 声

待合所の傘の句には油紙が匂うということ

だけで作者が寄贈主の善意を感じたのだから弱い。一年もたないうちに善意の傘が失くなったという句には作者のいきどおりの心持が充分にあらわされていない、それは傍観者的な表現だからであろう。又貸しの句にも作者の意志が出ていない、その貸した傘が大きな名前の入った番傘なのか、自分の傘なのかで感じの出し方が違ってくるのではないだろうか。路地の忘れられの句には、路地の住人であるがために善意を無視された腹立たしさなのか、それとも善意の傘が路地に置き忘れたのか、それとも善意の傘が路地に置き忘れたのか、どちらにもとれるようではない。俄雨の句の最初の句の下五の結び、涙ぐみというのは説明になってしまった、こうした場合は涙ぐんでいる人物の動きを描写するのとよいと思う。その点学生服を呼んで入れてあげたという句の方がよい。勿論この学生服は女子学生であることに間違いないと思う。最後の句にはほのぼのとした善意を感じさせられ

るのである。それはその善意の動作を適確に描き出されているからであると思う。

善意から寄贈の安全旗の末路 S

着想はよいのだがここまで説明してしまっ  
てはどうにもならない。安全旗の末路に對  
しての作者の感情をうたいあげねばいけない。

汗ばたばた済んで無縁の墓掃除 D

七十の余生交番を清掃奉仕 R

よい子等の善意兼目にあふれ

近所へ掃くという朝の水

無縁墓を掃除したという句は汗を流したとい

うだけでその善意を現わしているのだが浅

いと思う。もっと突込んだ動作が必要なので

はないかと思う。交番の清掃奉仕の句には七

十の余生という作者の感傷はよく判るのだが

ただそれだけでは共鳴をよぶことは出来ない

のではない。風上の落葉の句はいいところ

を詠んで居られるのが結びの善意という文

字に題にこたわった感じが受けたのが惜し

い。よい子等の句の善意と言う文字にはこた

わりがない、それはこの善意という文字によ

ってその動機や動作を知ることが出来るから

である。近所の句は申し分のない句であ

る。文字の使い方にその老練さを知ることが

出来ると思う。

問われたら自分の為と道掃除 K

どうも格言じみた句で、教訓調であるため

に句の味がなくなってしまうたようである。

意識せぬ善意で列車事故防ぎ

善意から貸した車が怪我のもと

勝 子 無 風



意識しない善意というものは道徳を知っているからであって、修身科のない今の小学生達のことを考えさせられた句である。貸した車の句はよくあることでそうした事柄をうまくとらえて作句せられたのがよかったと思う職業とは思えぬ深夜の救急車 S  
職業とは思えぬという語で善意を感じさせようとしているが物足らない、矢張りこうした説明的なものでなく具体的なものにしてほしかったと思う。

敬老か席を譲つて立つ若さ R 勇 剣  
ちよつと膝ずらず善意で席が出来 幸 雄  
譲られた善意の席で子は眠り 和 三郎  
吊り皮に余る荷物へ膝を貸す

最初の句は敬老かと言いつつ切ってしまったために善意からはなれてしまった感じの句になつてしまった。席が出来たという句は説明しているような感じの句ではあるが説明ではない、それは作者の感情が素直に読者にひびくからであると思う。子は眠りという句には本當のうれしさがある、こうした出来事を見ている人達の胸にも感謝の念が浮んでいることである。吊り皮の句も善意がなければ出来ないことだ、知らない人の膝へ風呂敷包みか何かをあずけて礼を言っている人を浮彫りにしてほばえまい。

新聞のちから善意を積み重ね 大 然  
底辺の善意三面記事になり み 子  
そつとしてほしい善意を記事にされ 静 水  
一枚の葉書に善意ある投書 談 士  
マスコミの威力というものは恐ろしい程で

ある。一寸した記事が大きな反響を呼んで更生される人があることはよく知られていることとで、この四句のどれもがそれぞれの作者の立場からそのことを詠んで居るのである。しかしその句にももう一つ迫力がないのは残念だが三句目のそつとしてほしいという句は一番よいように思った。

人ひとり救う善意のはだか銭 旭 宰  
ここまでは善意であつた人助け 真 奇  
はだか銭という語に迷つた、それは小銭であれば人ひとり救う程ではないし、箱に入れない、はだかのままの札束でなければだか銭では感じが出ないと思うのである。ここまではという語もハッキリしない。ここまでの出来事を詠まなければいけないのではないだろうか。善意という文字を使っていない句に

自家用車無いが路傍の釘拾い 淀 月  
老人へ目鏡貸したらかけて去に 与 志  
入信を今日もすめに来た熱意 母 李  
棄てたのにお宅の短か届けられ 滋 雀  
はかりしれぬ深さ短か言葉より 有 子  
という句があつた。路傍の釘を拾つておくという句には巾の広い善意を感じられたし、目鏡を貸したらかけたまま帰ってしまった老人の無邪気な姿に貸した方の善意も腹を抱えて笑つたことであろう。入信のすすめも善意からではあるが、しつこくやって来られては迷惑を感じさせるのが落ちである、善意の押売は有難迷惑でさえある。猫の句には礼を云うのにとまどつてゐる姿さえ浮んでくるよ

うで着想の素晴らしさが佳いと思う。最後の句は善意という題であるからその短か言葉も善意ととれるのだが、こうした句は課題吟としてむづかしい問題を含んでいる。

落し物届けつ善意口にせず 双 案  
落し物目に付く位置に下げてあげ 紀 世美  
前の句の善意口にせずという善意は住所を言わなかったとか、名前を告げなかったとかの事をあらわした方がよいのではないだろうか、そうしない善意という文字のひびきが恩着せがましくひびくようにも思えるのである。後の句はその行動をはっきり現わしている。後の句は佳い句になつてゐると思う。

仲裁の善意かえつて仇となり 縁 人  
善意からする口ぞえを煙たがり 無 風  
過ぎたるは及ばず善意こじれて来 有 子  
むかつ腹善意にとれぬ生れつき 松 太朗

仲裁の句には具体性がないので句意をあいまいにしているようで惜しい、その仲裁が何の仲裁であるかわかる句語を考えようとした。口ぞえの句にもこれと同じようなことが言えうであるがこの句はこれでもないだろう。過ぎたるは及ばずという句も句意はいいところをつかんでゐるのだが靴をへだてて搔くという感じ。むかつ腹の句は作者の感情が出ているのでよいと思う。結局客観的な句は具体的なものを見えないうえに弱いということになりそうである。

方便で嘘も善意と云う和尚 湖 平  
善意は有難迷惑でさえある。猫の句には礼を云うのにとまどつてゐる姿さえ浮んでくるよ



けの句になつてゐるようだ、これではいけない、ここからもっと深いものを見つめることに努力してほしいと思う。後の句には善意が溢れている、あれててせきこんでいる善人の姿を見ることが出来るのである。

善意をは逆に取られてこわがられ  
三時  
相手が女で善意と見てくれず  
雄声

前の句の逆にとられたのが何であつたか考へて見た、何かを教へてあげようとしたのだと思ふのだがこれだけの句では共感を得られない。句がばやけてしまつてゐるようである。相手が女でという句にはうがち味があるのでよいと思ふ。

用はないけど落目の人を訪ふ  
勇剣  
苦境に善意人生観変わり  
みさ子

日の出の勢いのときはワンサと人が訪ねてくれるものだが一つつづくと寄りつかなくなるのが人情というものである。前の句の善意はよくわかるのだが落目の人という文字になんだかこどわりたくなるのであるが適当な句語が思い当たらない。苦境の句の苦境という字を逆境とするとなだらかに読めるのではないかと思つた調子をよくするだけのだが。

好きな人すること善意に解釈し  
松風  
平社員あわれ善意に解釈し  
保夫

好きな人の句は惚れた弱身というか何をしてても善意にとるといふのがもう一つ突込みが足りないような感じを受けた。平社員の句の方は、すまじきものは宮仕えという言葉があるようにそこに平社員のみじめさを感じさせられたのである。

善意とは思へぬ今の叱りよう  
潤平  
西成の善意叱られてみたい

本当に叱られたのではないとわかつてゐるのだがその時の雰囲気でこうしたこともあるのであらう。西成の句は西成という特殊な地域の感じをよく描いていて面白いと思ふ。

反抗が善意の鞭に崩れて来  
李明  
深刻な心理をよく表現して佳句だと思ふ。

口下手に善意が見えてほほえまし  
弘朗  
うまい句である、やわらかいタッチで詠まれていて快よい感じのする句である。

悪意から善意に替へて寝るとする  
凡子  
悪意という上五文字を、ふんまんとするとその時の気持があらわされるのではないだらうか。

何事も善意に取つて追ひこされ  
美代  
好人物の焦燥感といったものをよく描いて成功している句だといえる。

当然な事が善意と言われる夜  
松太郎  
現在の世相に反撥を感じた作者の意図を汲みとることが出来る句である。

樹にかけた果箱に雛のかえる日よ  
句楽坊  
善意の果箱が実を結んだのである、温かい作者の眼をみる事が出来る。

善意の歓待にとまどう両上り  
八郎  
作者のこまかい心使いがわかる、ここにも善意があったのだ。

川柳が愛した生活とする物乞い  
千夏  
奪いという文字のひびきが強すぎる感じが作者はそこに憤りを爆発させているのであ

る。

善意から出たアヤマチとして許し  
弘生  
失策のつぐないは金で済むことなのであらうか、善意はお金では買えないものなのだ。

赤い羽根拾つてつけて交叉点  
東雲楼  
十円が惜しいわけではないがよく自分も失くするのでその理め合せのつもりであらう。

時期なお早し善意を裏切られ  
静水  
作者の実感なのであらうと思ふ。胸を打つものがある。

田舎駅善意に満ちた顔はかり  
淀月  
純粹な気持ちで旅に出るとどの顔もみな親しそくに話かけてくれるように思えるのも作者が善意の人だからである。

公園のアベック振り向かぬのも善意静観堂  
テイト  
一人で散歩に出たのであらうそこに若い人達の幸福そうな姿を見てほほえみ乍ら通るさである。自分の若い時のことを思い浮かべ乍ら。

最後にお詫びしなければならぬのは創刊号の本欄で締切日を私の思い違いから間違つて発表してしまい御迷惑をおかけ致しましたと締切日を次の通り訂正させて頂きますのであしからず御了承下さい。

十二月号発表  
研究題「掃く」  
五句以内  
新年号発表  
研究題「市場」  
五句以内  
締切 十一月二十日

宛先 大阪府南河内郡美原町丹上四〇四  
清水 白 柳

# 川柳塔

## 創刊に思う

吉田圭井堂

明治三年生れの父と明治七年生れの母を持った私は明治四十一年小学一年に入學した私の読本を見て、

「こんなすかみたいな読本で勉強して一人前の人間になれるのだろうか？」

と父母が不安がって居るのを覚えてゐる。父母は何度となく父母の幼時の読本を口ずさんで聞かせて呉れたが、それが皆漢字で仮名は殆んど変体仮名であったと言ふことであつた私は何とかして明治初年のそのむずかしかつたと云ふ読本を見たかと思つてゐたが図書館へ行つても外のことによつてそれを検べる時間がないままこの歳になつてしまつた。

ところが過日私の長男が阪急百貨店の古書展の出品目録にあつたので予約申込をしておいたところ、業者を始め十数人の予約申込者があり、開展日にもその希望者が全部集つて抽選した結果幸運にも只一人私の息子が引き当て手に入れたと当時入院中の私のもとへ直ぐ届けてくれたのを見て驚いた。

なる程父母が口誦んでいた通り、明治六年

四月師範学校彫刻「小学読本巻一が昭和七年六月十日発行非売品」大日本小学教科書総覽読本篇第一巻「小教編」編纂所発行の極めて貴重な本で下等小学入学の第一目に習う読本の第一回：第一課とは言わないにいきなり「凡世界に住居する人に五種あり○亜細亞人種○歐羅巴人種○メレー人種○亜米利加人種○亜弗利加人種なり○日本人は亜細亞人種の中なり」

又次の頁には、

「人の稽古に種々ありといへども、先づ書を読み字を写し物を数うることを学ぶ第一の務めとす幼稚のときは必ず学校に行きて、稽古をなすべし○学校に到りては何事も師匠の教へに順じて只管に勉強すべし、何事を学ぶにも出精するを第一とす○出精せざれば多くの事を覚ゆることなし、一事にても覚えたるときは能く氣を附けてこれを忘るべからず」

初めより多く覚えんと思ふときは却て忘るること多し○故に少し充覚え、一事をも忘れず日々怠りなく習ふときは自然と多くの事を覚ゆべし、

幼稚のときは先づ用の道具の名を覚え、其用の方を知るべし○

筆は字を写し又は画を写す、道具なり○算盤は物を数ふる道具なり○文庫は書物を入れる箱なり○懐笥は衣裳などを入る器なり」

明治に入つてからも、初年の間は日本外史、文章軌範、近古史談、などが教科書に用いられてゐた。論語や孟子や大学中庸に馴らされてゐた人々の眼（頭腦）は「読書百遍意義自ら通ず」式で難しいといふことなどには初めから何等の感じを持たなかつた」と書いてある明治初年の下等小学は六才から九才までで六才で入学すると、いきなり前に述べたように漢字と横に、の打つた変体仮名を習わされこれが下等小学の四級、七才で三級、八才で二級、九才で一級となつてゐた、最初に書いた。

「凡世界に住居する」云々は六才入学の日から人民告諭、七才の三級で孝経、四書の内の大学中庸は何んと八才の二級で素読から解釈まで習うのだから如何に酷であつたかを物語るが亦それだけ「読書百遍意義自ら通ず」で本人も一生懸命努力した事は今のの調子で下等小学小学中等科高校大学と進んだ昔の人が如何に努力させられたかを想う時、今の教育はすかみたいたと私の読本を見てそう云つた父母の口癖が克く判つた。

明治三十年前後の帝國議會に於ける各大臣の答弁や各代議士の質問集を読んで何ん政治家達は氣取つた文句を列べたものだと思つてゐたが、この小学読本巻一の第一頁だを読んでこの難しい漢字を見、この変体仮名を見て氣取つた政治家のやりとりが當時の人々の日常茶飯時の言葉として使われていた事に一驚した次第である。

従つて下等小学を出て小学中等科を卒えた人は、みんな大学中庸論語孟子は云うに及ばず五経十八史略の素読が出来たのも当り前であつた。下等小学に這入つていなく共一門前のお経」で読み書きは出来なくとも、言葉では話せ又聞いて書く理解が出来たのも亦当然と云うべきだと思ふ。

そこへ来ると近頃の大学生が病氣見舞の手紙一本まともに書けぬは極端に近い漢字の制限で明治生れの父母の耳から這入る言葉と学校で習う簡素化された文字とでは文章にならぬのも当り前だろう。

そう云うことはわれわれが古川柳を読んでも云えることで、昔の人は何とむずかしい言葉や文字を矢鱈に使つて喜んでゐたものだと思つてゐたが、それが実は茶飯時の言葉や文字であつたのだなと浅学な私は始めて判つた次第です。

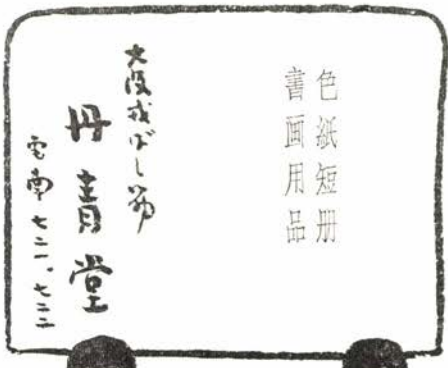
私は敢えてむずかしい言葉や文句を多く使えと云つてゐるのではないが明治から大正へ大正から昭和へと、文字が簡素化されるに従つて人物が次第に小粒になり、今の政治家は選挙毎に小細工は効くが小粒になつて月月の用は愚るか日日の用もなさぬ事で判る。

政治家がそうだから経済人も段々小粒になり、公共事業体でも労働賃金があがれば直ぐ運賃の引上げを策し、工賃があがれば直ぐ売値の引上げに狂奔する「如何にすればコスト高を押えることが出来るか」を考へている経営者が居ない「元があがれば売値をあげる」式の経営法なら私だって大会社の社長が勤ま

る。人事院とかの勧告で、公務員の給与の引上げが発表されると直ぐ国会を召集して追加予算を組む、こんな政治なら私だって首相が勤まる。

昔私と深い交際のあつた今は亡き柴垣完二と云う「立体幾なしの織機」を發明した有名な人から直接聞いた話だが、この發明の爲始めは大阪府の協力資金を得てゐたが完成に至らぬ裡に府から援助を打ち切れ、その後は大阪市の理解で資金を出して貰ひ、大正の末期から昭和の初期で漸く完成した。それが大阪市西区川口町に於つた大阪府立工業奨励館に横巾十二米の「立体幾なしの織機」を据付けこの横巾十二米と云うのはその当時日本に二十米以上のシカル盤が無かつた爲で、若し二十米のシカル盤があれば勿論横巾二十米にした筈だつたさうである。そこで大阪府市が共催で桐生の蚕糸学校の校長始め、日本紡、鐘紡、東洋紡、歌島紡等日本の十大紡の社長を招いて展示した。桐生蚕糸の校長出席の爲西下の車中で「あてもない斯うでもない」と色々考案を練つてココへ来たが「何分私等は從來の織機と云う概念から脱なしで織物が出る筈がない」と云う。一本の軌道に乗せて考へを進めてゐた爲「こんな奇想天外の着想には思ひも及ばなかつた。ココが素人の恐ろしい処で是を奇想天外と云ふずして何だと云いたい」只素人はとんでもない事を考へものだの一言に尽きます」と呆れ返つた。

亦日紡鐘紡その他の社長連は皆腕を拱いて眼をパチクリさせてゐるだけで一言も発しな



い。別室に招かれて係員から所見を問われた時、各社長は、異口同音に

「成る程感心もし呆れもしたが私等はあの革命的な織機を私の会社へ据付けける勇氣を持ちません。なぜならエジプト文明の昔から今日まで世界各國が今日の紡機を完成さす爲に打込んだ金はエジプト文明以来今日まで世界各國が戦争に打込んだ金より遙かに莫大な金であることを考へ、また世界中の需要家が現在の横巾三十センチ内至六十センチで満足し充分用を爲しているのに、この大金を掛けて紡機を叩きこわしスクラップにしてまで世界中の誰も要求していないこの無制限に近い大巾の紡機を据える意



志はない。鉄道省の無蓋貨車や船の甲板の積荷を覆うテントなら繕目なしの大巾は経済的で便利であるが、需要の率から言えば問題にならぬ量ではない。それよりも私等は「どうすれば小巾一反の晒布が一鎊安く作れるかに日夜頭を痛めている。それが輸出を盛んにし引いては外貨を獲得して国を富まし、国力を充実させる結果を生み、株主の信頼に答える事です。そうする事が私等の最大の関心事です」ときっぱり言い切って引上げて行った。その

為の革命的な「立休蔵なしの織機」は遂に日の目を見ず大東亜戦争に際し鉄材の供出に引っぱりスクラップになってこの世から消えた。

これと云うのも下等小学校以来大学卒業まであのようなむずかしい教育を身に付け下等小学の僅かハ才で「古えの明德を天下に明かにせんと欲する者は先づその国を治む」式の教えが国家優先の観念となっていたから、政治家も経済人も初物に飛び付く前に国家との関連性を考える結果となったことと思う。そうした半面従業員を酷使した所謂女工哀話も数々生んだ弊害にもなったが、そこへ来ると今の政治家も経済人も学者も宗教家も「初物」にとびつくことを恰も時代の先端を行く賢人のように考えている連中がウヨウヨしている。その為需要とのバランスも考えず設備の過大禍で倒産が相つぎそのそば杖を喰って泣いている下請業者が巷に溢れている。

川柳人の中にもこの初物食いと云うのがいて、徒らに新人振ったり川柳の革新を気取っ

たり、前衛派的川柳を唱えたりして得々として居る人が居るらしいが、昔から一流一派を編み出した人は徹底的に「古きを究めて」後不勉強家で案外革新川柳を叫んでいる人の多い嫌いはないか。

元来川柳をやった昔の人は皆相当の教育を受けた人で寺小屋一つ行ったことのない耳学問だけの人で如何に利巧でも自分の思ふ事を十七字に纏めて発表することは出来なかつた筈だ。仲は大隈重信のように勅語の署名以外一字も書かずして幾多の名著を出した人もあるが、それは例外中の例外で昔の川柳作家が耳学問だけで字が書けず、一々能筆者に代筆して発表したのではあるまい。

川柳雑誌四三六号の北川春果先生の「川柳忌に思う」の一節を茲にお借りする

と宝歴七年八月二十五日「万句合」の投句が総数二百七句で毎月五日、十五日、二十五日と十日毎に次第に増え六年目の宝歴十二年十月十五日には実に一万〇四九一句と万合を越え明和になってからは益々評判が好くなり、川柳翁没年までの三十三年間、寛政元年まで選句を行ったが、現在判明しているだけでも一万句突破が三回に及んでいるとお書きになっているのをみて、昔の人は明治初年ころでないむずかしい事をそれぞれ身につけていたもので、それが庶民に親まれていた川柳であれば

ある程、驚きであって、武士や雲上人の遊びとされていた和歌でないだけに、恒に武士や特権階級にしていたげられながら、庶民が如何に貧しい中からでも寺小屋に通って学をおさめていたかがうかがわれる。

その先覚の句を究めようとせず、徒らに革新を叫んだり新人振って訳の判らない川柳を発表するのは差控えるべきだと思う。

どうか「川柳塔」はこの軌道を外さずに進んで欲しいと思う。川柳雑誌を「川柳塔」に改題しそれを推進して行く人々も川柳界から抜け切れぬ人達ばかりだと、勝手に解釈せず、川柳を基礎におきながらも川柳界を抜け切って「川柳塔」としての新しい魂を打込んだ川柳誌に発展して行く事を心から祈って止まない次第です。

お買物は近鉄へ



アベノ・上六  
近鉄

※木曜定休※アベノ621-1231※上六771-3331※



小西雄々選

立ち読み 鶴丸  
立ち読みが 氣になる 奥の老眼鏡  
立ち読みで 仕入れた 町の博学者  
立ち読みで 折っていた 売れど  
立ち読み の 株の知識が 仇となり  
買った本 脇にかかえて 立て読み  
立ち読み は家で 見られぬ 本ばかり  
立ち読みへ 折目さが している 続き  
立ち読み の 常習という 顔なじみ  
立ち読み に あつた えむきの 俄雨  
買う 氣にも なれず よい立ち読み  
立ち読み の 背中へ 声が 掛りそう  
立ち読み の 知識で 旅のプラン 練る  
広く 浅く 立ち読み 案内もの を知り  
立ち読みへ 主人の 電話 荒々し  
立ち読みへ 弟夕飯 告げに 来る  
新刊へ 立ち読み 煙草の 灰 落し  
立ち読み 間にあつては 主婦の 知恵  
肝心の とこが 立ち読み 見当らず  
立ち読み が 楽しい 風呂の 掃り 途  
立ち読み の ペタン 時々 場所を 変え  
立ち読み を 叱られた 子 の あどけさ  
立ち読み を 刑事 の ような 瞳で 監視  
咳払い しても 立ち読み つんばめき  
立ち読み の 前だけ 整頓する 抵抗

一冊もみれず 立ち読みだけの客 松太郎  
以下次号まで立ち読みの根をみせ 旅風  
立ち読みをしてもし男のハイライト 勇剣  
新刊へ 立ち読みも少し 気を使い あいさ  
立ち読みの 常連 苦笑して 並び 無風  
立ち読みへ 油断のならぬ子もまだ 旭峯  
立ち読みへ 泳ぐ手付きで わざ入り 幸雄  
立ち読みにまぜかえされた週刊誌 卯之助  
デート 待つ間の立ち読みもまだ どんたく  
老眼鏡 携行してまで 立ち読みし 保  
佳句  
立ち読みに 店主列車の時刻告げ る享  
立ち読みの 子供帰って 店はひま 庸佑  
立ち読みの 辞書へ 用意の虫眼鏡 李朋  
打ち水がかかって 立読文句言う 雄声  
立ち読みへ 閉店ベルのけたたまし 代仕男  
人の句  
立ち読みの 中絶記事で 気が迷い 東雲楼  
地の句  
立ち読みへ 退いた 退いた 如露の先 淀月  
天の句  
立ち読みも 追われ 鍵っ子には 日暮 光道  
自句  
立ち読みへ 遠慮はしない 汚れた手 光道  
円満  
円満に納めて ジョッキー おごらん 味平  
伊藤茶仏選

世渡りへ円満すきて見くびられ雄々  
円満なところを見てきた独り者大然  
新婚の窓へ出戻るシルエット祥二  
円満な家庭へ満ちる水をし勝子  
円満な気配へビール出しに立ち淀月  
円満な人と見られる禿となり滋雀  
円満主義ファイトがないとも言愛鳩  
円満な夫婦の聲に艶があり松風  
円満解決をボスが買って出る季替  
円満を説く宗教にある派閥章雅  
円満にゆけばいったで世間の眼代仕男  
円満に離婚するらし週刊誌静観堂  
労資共 暗ればらとして室を出る新雪  
二階付をさせて円満策をとり水車  
円満な村が選挙で割れちまい秀峰  
養子かと誤かれる程にご円満正夫  
円満な遺影に焼香順を待ち初甫  
手のかかる宅でとはんとは楽し光郎  
二で割って円満解決したと言うろ亭  
円満の一言養子の縁さめる野迷路  
親子ほど違うお年でご円満三時  
円満解決何だか裏がありそうな庸佑  
円満に妥協する気か語尾を下げ句楽坊  
円満な家庭とわかるお人柄松太郎  
円満な相と易者は喜ばせ杏花  
円満な人柄へ町会長持てゆき野菜  
円満に徹した人の顔の皺勇剣  
円満解決お金がしてくれるあいさ  
肩を揉み合って夜長の老夫婦卯之助  
円満なところ二仲で書く長さ旅風

倦怠期も知らずすごした老夫婦  
 円満が遺産をめぐり削れかけ  
 人柄が円満だから狩り出され  
 円満な相で遺産を喰いつぶし  
 世帯持つまで円満な顔でした  
 奥さんに百点つけて無事な日日  
 両方を歩み寄らせて手を打たせ  
 円満なママは我が家の観世音  
 円満の二字に正論なきつかれ  
 円満な手打ちへ割れている拍手  
 円満な話の裏に義理があり

魚山 双楽 旭峯 弘道 可住 どんたく 湖平 無風 雲棲 千翁 志朴

田満な 顔を信じて 詐欺にあい 酔夢  
田満に 馴れて 刺戟が ほしくなり 雄声  
田満に おさめて 帰える 影法師 旅風

ム  
I  
ト

服部 十九平 選

二人へムードを添える月が出る 愛 鳩  
悪る酔に祝賀ムードがわやにされ 東雲楼

ジェムスと彼女ムードに乗つて、ホームバームードを出した縄のなかに、金で売る愛はムードを口にせずいつからか嫁のムードに従ひてゐる。ムード代はいつちうもステイルムおかしくなムード俺は仲間外れだつたホームバーママにも一つ呑めと言う二次会へムードが好きでついてゐる。ふらふらとムードのつて好と云ひ反騰のムード新に客溜り明治生れ音楽喫茶にとけ込めずオールドミスと二人切り居ムード

浪花節ムードで 仲裁おさまらず  
麦飯の頃のムードで 再会し  
御所の庭 平安朝のムード見る  
サンガラス女 ムードのきつい顔  
縄のれんくくって 客の賑やかさ  
討論の果ては 酒屋で 意気合ひ  
図書館のムードと合ひぬ ニューモード  
ムードだね宵の喫茶のセレナーデ  
言いたいこと言えぬムードを感じ  
折角のムードをこわす 泣き上戸  
一歩歩るくムードに引き込まれ  
百貨店 秋のムードに 包まれる  
慰安バス 唄うムードへ 下戸眠り  
一言が お気にさわって 飯中座  
盛りあがるムード 音痴の歌が出る  
幕間のムード 歌舞伎の老夫婦  
外遊が 戻ってムード 盛りあがり

味勝千大古旭双鶴庸初良志松卯專魚滋保雄繁醉秀湖臥龍子どんたく可弘杏清  
平子翁然心峯樂九佑甫造朴風翁山雀夫声郎夢峰平子住道人

紅一点果実のようなムード出し  
折角のムードをこわす咳払い  
石庭のムード外人解せぬ顔  
愛の果のムードを母は逃げて来る  
倦怠のムードは猫にもちと分り  
まだムード出ないと宵の女給言い  
同窓会肩組み合つてノイエ節  
ムード奴に入つたと妻をまた連ち  
天才的ムード作りで下戸であり  
小父さまのムードいかすと冷たい  
文豪のムードに浸る齡となり  
原色のムードがうけるドサ廻り  
演出の拍手ムードを作らされ  
芸術の秋へムードのベレー帽  
庶民の雰囲気作る焼豆腐

五客

パチンコムード軍艦マーチ台  
ムードには弱いところテクニク  
桃色のムードへ齡をふと思つ  
砂に石据えたムードが判りかけ  
クーラーにあらしい鮎が反りかち

人

告白のムードをこわすゼット音

地

日本のムードにそわぬ塔がふえ

天

とけこめぬムードに耐え肩の凝り

軸

主婦怒。値上ムード(しゃも)デモ

る  
代仕男  
野菜  
光郎  
縁人  
李朋  
光道  
惠三朗  
無風  
淀月  
旅風  
松太郎  
弘朗  
勇劍  
章雅  
無風  
惠三朗  
旅風  
淀月  
保雄  
章雅

第百七十四回 大萬川 柳

新年度 第二回 「額(がく)」

入選発表

選者 清水白柳  
 投稿総数 五百三十七句  
 入選 六十五句

玉島 三林坊  
 額一つ手に入れ小金ためている

豊中 古方  
 額の価値判るお客は持っていない

南河内 吸江  
 額の父自分の齡に近うなり

大阪 没食子  
 工作で造った額を手放さず

大晦日 額もおろしてはたいとき  
 大阪 水客

大阪 弘生  
 額だけのお値段ですと悪るびれず

神戸 どんちく  
 殺風景を見かねて額をもつてくる

大阪 金三  
 壁の孔かくす静物ぶらさげる

大阪 水京  
 ノックする音へ額見る目がはなれ

京都 八九寸  
 力作だから額縁にも気を使い

大阪 保夫  
 額縁を買う気で義理をたてておき

女ばかりの世帯で額をもてあまし  
 和泉 東天紅

額の中陛下は神のまま在わし  
 大阪 あいき

忍耐の額のある応接で待たれる  
 吳 颯光

かけっ放し額は親子に字が読めず  
 松原 万竿

額かけてから引越しそばにする  
 倉吉 弘朗

入札の額びつたりでうたがわれ  
 大阪 章雅

篆額が読めず一と風呂浴びにたち  
 布 施 清人

華儀屋に紋つき着せてもった額  
 和歌山 木魚

偽ものと折紙ついた額を掛け  
 笠岡 桃里

額縁代だけでと個展つきあわせ  
 岸和田 きさ子

表彰状の額をずらりと病みつけ  
 大阪 形水

合併に初代の額はおろされる

額の字をほめ然しなと読むんです  
 加賀 久雄

講堂の額なつかしく同窓会  
 大阪 滋雀

誠実の額をにかけて高利貸  
 大阪 竹莊

敷かれた息子見ている額の母  
 大阪 幸雄

額だけは自分で買えと感謝状  
 大阪 進之助

一周忌まではと額で飾られる  
 大阪 幸雄

浮世絵の額は斜めに雨が降り  
 大阪 幸雄

先代の額へ不況の策を問う  
 大阪 幸雄

額縁もついでにほめておく個展  
 大阪 幸雄

号十萬保険もかけておく名画  
 大阪 幸雄

大観の額応接におく社運  
 藤山 可住

優勝の額は校長室に掲げ  
 富田 東雲楼

奥伝の額を掲げてミシン踏む  
 富田 東雲楼

忠孝の額くすぶったまま旧家  
 富田 東雲楼

豊満なマダムは額の裸婦に似て  
 富田 東雲楼

寝返りを打った眼額へ持ってゆく  
 石川 宗太郎

額あわれサツに埃りの背を見られ

11月の句会

富柳句会

時 三日(水) 一時  
 題 「秋晴れ」「祭」「菊」  
 所 富田林市塚筋 東増兵別館

玉造川柳会

時 十日(水) 午後六時半  
 題 「役所」「診察」「影」  
 所 玉造交差点南一〇〇米 大阪信用金庫

明和研究会

時 二十一日(日) 一時  
 題 「手紙」「階段」「地下」  
 所 阪神鳴尾駅下車南二百米 鳴尾公民館

南大阪川柳会

時 今月に限り十九日(金)  
 題 「実行」・「無難」「満」  
 所 アベノ松崎町三ノ一〇 割烹 大 萬



# 金 泥 集

## 麻 生 菰 乃 選

### 「艶」

インタービュ喜の字と思えぬ顔の艶 阿茶  
 この人にあんなと思う声の艶  
 百姓の目には我田の稲の艶 きさ子  
 ハイウェイ新車の艶が陽をはじく  
 勝力士皮膚の艶まで言うてほめ 勝子  
 二十年色艶褪せた額の父 一栄  
 バックの艶出てきた頃に型うさり  
 顔の艶失せて老妓の芸の艶  
 艶聞にしたマスコミの無責任 酔夢  
 舞扇六十路に見えぬ艶やかさ  
 艶っぽい話しがケリで散会し 清子  
 やっと艶出て来たパイア落して来

新年号発表「こよみ」十句以内

ベ切・十一月二十日

二月号発表「うどん」

十句以内締切・十二月二十日

大 阪 梅 里  
 およしなさい顔が見てはる応接間  
 一年中読めないままの額をかけ  
 大 阪 柳 志  
 額読めず筆勢をほめ墨をほめ  
 先祖代々未だに読めぬ額をかけ  
 嫁が来て家風を交へる額をかけ  
 大 阪 小松園  
 左からの額の文字読む昭和の子  
 額の裏突差のかくし場所になり  
 額の下思案にあまる額並らふ  
 バレーボール優勝額と共に嫁き

壱 圭井堂  
 額一つない応接へ放つとかれ  
 待たされて漸く読めた額の文字  
 「和」の額の応接室で採めつけ  
 額をみて大した人でないと踏み  
 五 客  
 笠 岡 忠 三  
 先代の額を叱言の種にする  
 岡 山 一 声  
 日曜大工額の四すみがつつかず  
 和歌山 木 魚  
 とびとびに読んで立派な額と言ひ

奈 良 凡 茶  
 額の字のうかつは左から読まれ  
 大 阪 阿 茶  
 子が育ち裸体の額を入れかえ  
 人ノ句 大 阪 弘 生  
 額縁も手製ですがと祝うてくれ  
 地ノ句 壱 圭井堂  
 額添えてやれば中味を替えてかけ  
 天ノ句 富田林 美 房  
 表彰の額はレジヤーのものばかり  
 選者吟  
 標札だなどと稲荷の額を読む

大 萬 川 柳 ベ ス ト テ ン (新年度第二回)  
 一 圭井堂 七、五  
 二 美 房 六、五  
 三 宗 太 郎 六、五  
 四 梅 里 五、五  
 五 小 松 園 五、五  
 六 好 里 郎 五、五  
 七 桃 志 五、五  
 八 吸 江 五、五  
 九 静 馬 四、五  
 一〇 可 住 四、五  
 一 凡 茶 三、五  
 二 没 食 子 三、五  
 三 見 二 三、五  
 四 遠 竿 三、五  
 五 万 九 寸 三、五  
 六 弘 生 三、五  
 七 一 榮 三、五  
 八 久 雄 三、五  
 次ぎの兼題「初対面」  
 以下 署  
 大 阪 市 阿 倍 野 区 松 崎 町  
 大 萬 川 柳 会

十二月の兼題「筋書き」  
 発表 切 十一月二十日  
 発表 切 十二月二十日  
 投句先 大阪府阿倍野区松崎町  
 三ノ十



川柳「たけはら」の高校生柳人に贈まれた清水白柳氏（第八回近県川柳大会）



## 柳 界 展 望

あちらからこちらから  
お便りを待っています。

（橋高薫風・担当）

の句は、

「曉を抱いて闇にある菅」で、平和への身もだがにじみ出ている。

☆川柳忌に新潟県物故者慰霊川柳大会を開催、積極的な企画活動を通じる柳都川柳社は、白石朝太郎氏選の雑誌新選集の投句を十一月号から一人一句に制限した選者と作家との厳しい対決の場を期待したい。

☆鶴形の句碑が金沢市の卯辰山の玉兎ヶ丘に建つことになり、二十七回目の命日にあたる九月十四日に除幕式が行われた。

「万歳とあけていった手を大陸へおいて来た」などレジスタンスの作品を残して、昭和十三年、二十九才で獄死した石川県高松町出身の川柳作家である。句碑

潟県信用組合ホールで。出

句は三句、「最近の時事問題を詠ったもの」投句は十一月八日まで新潟市中通り読売新聞新潟支局越路時

事川柳大会係宛（無料）☆川柳岡山支部は岡鉄川柳会（責任者三宅哲郎）と、

川難備前支部は備前川柳社（主宰浜田久米雄）と改称引き続き活発な川柳活動を行う。

☆川柳難玉造支部（大阪市）

☆玉造川柳会と改称、十月十一日（月）午後六時から大阪信用金庫玉造支店で発

足記念句会を開催。同句会はまた、飯市郎追悼を併せている。

☆和気川柳会・佐伯川柳会（ともに岡山県）合同句会

は十月十七日（日）午後一時半から和気郡佐伯町役場で開催。

☆川柳「たけはら」（竹原

市）十月号は第八回近県川柳大会特集号として十月一日発行されたが、表紙の柿の絵の彩色を高校生の少女二人が買って出て、三百余部を丹念に仕上げたという隠れた美談がある。

☆第三十回秋田県川柳大会は十月十日午前九時から秋田県労働会館で開催。時実

新子さんが選者として姫路から出席された。

☆第十九回岩手芸術祭参加川柳大会は、十月二十四日（日）午前十時から盛岡市岩手県教育会館で開催された。

☆第二十回尼崎市文芸祭川柳大会は十一月十四日（日）正午から中央公民館で開催。兼題「ポスト」長谷川三司選「肉」海士天樹選「週刊誌」金泉万葉選「髪」石立不折選。

☆川柳文化祭第三十二回京浜川柳大会は十一月三日（文化の日）午前十一時から渋谷信用金庫ホール（東京都渋谷区神宮通一ノ五）で

開かれる。宿題・足跡・柿・気兼ね・アンケート・初

対面・片道・宝・痛い・席題四題当日発表。

☆堺市民文化祭第十九回市民川柳の会は十月三十一日（日）午後一時から堺市教育会館で開催、兼題、菊・

話・落書・騒音、柳話中島生々庵氏、主催堺市文化団体連絡協議会・堺市・堺市教育委員会。

☆堺市教委主催、第三十一回堺市成人学校は九月二十五日から十一月二十日まで

御陵道の堺市立高等学校に開設「川柳の手ほどき」の講座が設けられ、西村左久良、八木摩太郎の両氏が講師として出席される。

☆川柳難玉支部が堺川柳会と改称になった。事務所は引き続きいて堺市九間町東二丁八木摩太郎方に置かれ、十月十日午後六時から第一回句会が開催された。

☆「川柳雑誌」「川柳塔」と改名の記事が、九月二十三日付けの毎日新聞に掲載された。

☆福永泰典氏（京都市）は「川柳塔第一号」がありがとうございました。立派なもの

が出来上りました。心からのお祝いと、柳界のためにお礼を申し上げます。」と祝福の言葉を寄せられた。☆布部幸男氏（京都市）、「A判になって句のたまたまに新風を生じたようです。路郎宗の味とところを置いて下さい。」☆改題「川柳塔」の発刊大慶に存じます。川柳きやり吟社

月号が出て皆さんの決意が分る気がします。立派だと思えます。何といっても、腹乃女史の「生命の一頁」は珠玉の文字であり今後の「川柳塔」への示唆多きものでしょう。」☆石川栗郎氏（明石市）齊藤大雄氏（札幌市）の諸氏からお祝いの言葉を頂戴した。

☆尼縁之助氏（出雲市）は九月三十日に来阪、寸暇をさいて本社を訪問、生々庵氏、一三夫氏と歓談された。創刊号を祝うためのわざわざのお立ち寄りであった。☆若柳潮花氏（高槻市）は九月十九日（日）常盤津錦司師匠の師籍四十周年の演奏会が、御堂会館で催されたのに賛助出演、常盤津一三保の松の天女を舞われた。また八月二十四日には三越劇場で新曲浦島を踊られた。

☆高鷲垂鈍氏（尾道市）は失明のご不自由な身体にも拘らず十月三日の川柳塔同人総会に出席、満場の拍手で迎えられた。

## 山口誓子先生題句で 直原玉青先生（本誌表紙）の 近作小品展開催

とき 十一月十六日から  
十一月二十一日まで

会場は大阪阪急百貨店六階の  
特別画廊で催されます。  
ふるってご参観下さい。

☆吉田隆史氏（神戸市）からの祝吟「浪花から名物産る川柳塔」

☆川柳研究社（川上三太郎氏主宰）が昭和四十年九月東京都台東区下谷二丁目二〇番九号へ移転。

☆弘津柳慶氏（広島市）の住所が、広島市皆実町二丁目八番五一号専売公社広島地方局内へ移転になった。

☆若本多志氏（西宮市）の住居番号が左記の通り変更になった。

☆兵庫県西宮市津門西口町十二番十五号

☆長野井蛙氏（防府市）の住居が山梨県防府市八王子二丁目一番二十二号に変更

☆山村都ね夫氏（函館市）の住居が函館市末広町七番七号に変更になった。

☆川雄玉造支部の会員飯市郎氏は商用の旅先で患われ、帰阪後鳥潟渡院に入院治療されていたが、九月十二日胆嚢炎で死去された。年五十二。哀悼。

激しい疲れ 神経痛 肩こり・腰痛 心臓病にも

▲アリナミン®のもう！

タケダ薬品

— 55 —



本社  
十月旬会  
会場 自安寺  
40・10・8 午後6時

まず生々庵氏が同人総会をひらきいよいよ川柳塔が本格的に活動を開始した近況報告をされ、ついで古方氏久しぶりの柳詩(次号で発表)に句会ムードが川柳一色になる。投句者をふくめて八十名以上ともなると一旬入選することがなかなかの難問である。ガン張っていただきたい。毎月の川柳塔杯をどのようにするか、近く発表できるようにする。十一月は五日が旬会日です。

出席 与呂志・柳太・水京・圭井堂・判志・八郎・文秋・一三夫・静馬・一舟・白柳・進之助・たつみ・古方・一栄・柳宏子・太路・警二・好郎・瓢太・正典・白溪子・言也・武助・葛城・いさむ・竹莊・操子・きさ子・宏子・貞山・水客・狂二・醉升・滋雀・専翁・弥生・一雄・泉睦・すむ・亜成・多久志・季賢・生々庵・トメ子・金三・吸江・椽人・句楽坊・有子・みさ子・雄峰・六竜子・形水・梅里・鉄児・万的・春巳・小松園・栗・庸佑・凡子・舟遊・(河井庸佑整理)

席題「メニユー」 高橋操子選

味もよくメニユーの時価が気にかかり  
六階の景もメニユーに入れてあり  
子にメニユー親は値段を気にして居  
ふところの具合メニユーの時価を  
外遊のメニユーはあれこれ手教え  
エビフライ時価はうのが気にいらず  
季節もの時価はメニユー抜け目なし

好郎 喜さ子  
双葉里 泉陸  
栗太

値上りメニユー次ぎ次ぎ貼る足  
生つばを吞みメニユーに目を通し  
横文字のメニユーへ指で注文し  
子をつれて安い方みるメニユー  
メニユーも匂いできたレストラン  
金縁のメニユーも嬉しシャンドリア  
酔うてくる程にメニユーの値を忘  
メニユー見て話なかなかとまら  
まずビールでメニユー見る仲間  
メニユーだけ一流だった旅の宿  
大めしに味噌汁メニユーなどい  
メニユーの値頃をうで目が止まり  
メニユーまで持ってきた値を吹  
メニユーの時価はうつかう手出  
お馴染はメニユーも見せず品出し  
フランス料理指でメニユー持て来  
横文字のメニユーたらい回しされ  
番号で注文をする支那料理  
始めからメニユーをうておるは  
仲人の外はメニユーを気にしてず

席題「忘れ物」 辻白溪子選

網棚で主のない荷が無事に着き  
手に持った物を忘れて探してい  
忘れ物監視するよ、車掌の目  
わすれものよ柿の実残って  
母の責任にする一年生の忘れ物  
忘れものないかと祝儀はめかし  
友達に借りて事足る忘れもの  
忘れもの自分のもので叱られる  
安い傘何べん忘れて帰って来  
忘れものように店番閑な夜  
忘れもの受取り帽子 おいて去に

金三 凡子 万三夫 武助 静馬 太路 小松園 水京 生々庵 柳宏子

滋城 葛城 庸佑 圭井堂 古方 鉄児 鉄路 文秋 春己 泉睦 庸佑 鉄路 進之助 梅里 静馬 柳宏子 武助 太路 舟

席題「横取り」 丹波太路選

横取りをされてもいやと言ふ義理  
横取りをされても善意をまた信じ  
とりもっておいで横取りするつ  
横取りをしたとセールの意地にも  
勧誘員横取りしたいねばりよう  
特売場迷てるうちに横取られ  
横取りをしたのをネタにゆすら  
子猿の貰い物までボス猿が横取  
横取りをされて素直に暇をやり  
決断が鈍く恋人横取られ  
費うだけついで彼女を横取られ  
横取りと言つこう、恋愛自由主義  
横取りをした積りヒモがついて  
女房を横取りされたコップ酒

忘れ物飲んだ店の名も忘れ  
事もあるうに子供忘れたマイク  
忘れものどけて犬にかみつけれ  
忘れ物みたいに迷い子 貰い受け  
また逢いに顔でわさりと忘れ物  
忘れ物した顔でいる羅漢さん  
ひき出したあるだけ探す忘れ物  
喋るだけ喋り用事は忘れとり  
忘れものこきえ本気でない家出  
一泊の宿へ忘れて来たためね  
忘れものないかと出勤念押され  
衣更えのポケットから出た忘れ物  
店頭につるされていられ忘れ物  
言いわけのすし網棚へ忘れて来  
信仰をしてくるが珠数の忘れ物  
忘れもの洗濯をして届けられ  
温泉へ汚ない足袋を置き忘れ  
忘れ物貰うておく妓の電話

すすむ 柳宏子 操郎 好栄 柳宏子 瓢太 梅里 一三夫 進之助 梅里 鉄路 鉄路 柳宏子

滋城 雄京 水京 竹荘 水客 六竜子 柳宏子 春己 太路 六竜子 白柳 文秋 梅里 白柳 白溪子 白溪子

横取りされたように隣の魚籠の  
横取りの魔手総て異議を出し  
横取りの手から南京豆こぼれ  
横取りはしたけど柿は渡った  
横取りをされてライバルに知り  
横取りをされるハンコ知らず  
横取りをされたいとする肘を張り  
横取りをしてまたすこむ黒眼鏡  
横取りの真似ごとをするさくら  
横取りをする気は高いギョラ出  
横取りのあまりの素早やさにあ  
横取りした座席でれくさそうに本  
横取りした漫画におやし夢中なり  
歌謡曲兄の野球に横取りられ  
僕からの電話子供が横取りられ  
後輩に横とりされた隠し芸  
よく喋る男に話題横取りられ

吸正專万梅多柳洛亜梅み李与形ど文む選太言水金静万言文圭葛鉄一滋滋小い万  
江典翁の里志園た酔成里子朋志とく水秋路也京三馬の也秋城児雀雀松園わ

生々庵　すさむ　正典　太路　東雲楼　静観堂　鉄水庵　雄峯　醉漢子　白トメ　文秋郎　好郎　没食子　金瓢　醉梅　阿舟々　生々庵　万三夫　一三遊　舟遊茶　凡溪子　白子　葛城

静栗万白季言万生滋一万言栗双吸凡八雄梅水狂阿文章貞庸与喜水吸武太言梅柳  
馬里柳贊也里庵雀荣里也 渠江子郎峯里客二茶秋雅山佑志仙客江助路也里大



持ち前の味なウイットで座を沸かし、持ち味を生かす寛美の眼がとぼけ持ち味をなかなか他人をおもさず、バタ臭い持ち味若い層にもてシニミリとさせて持ち味ある高座席、持ち味におとぼけもませて議長席、着物きて大和無子ここにあり、持ち味を生かす間もなく左遷され、老優の昔の味をなつかしく京の持ち味しみじみ茶漬の朝の膳、持ち味を生かす老舗が味で売れ、今日まで無事持ち味がそうさせた、持ち味を知っててくれる友とのみ利かぬ気は、師匠と違ふ歳さばき下駄みの持ち味、いつか陽が当たたり大阪の口で持ち味生かされる、持ち味に、まだきかかった芸の虫、大部屋の末だ持ち味立ちゆけれど、持ち味を生かせば老舗出し切らず、ばくち根性が持ち味ですと悪びる、庖丁の刃え、持ち味を殺さる、持ち味が遠い、代役褒められる、期待した持ち味、出ないままに幕、五郎八の持ち味、庶民の中で生き、持ち味がやっぱり社長目の目に止

千夏 滋雀 阿茶 葉升 生々庵 繁太郎 進之助 好客郎 水山 貞方 古莊 竹園 小松園 いさむ 梅里 生々庵 六竜子 万さ子 万里的 小松園 雄三夫 与呂志

鼻ばかり 気になり 話空で 書く  
鼻の差は 写真に任す 競馬場

千夏  
六童子

横顔も鼻のかたちで儼然とした言ふ。鼻筋が通つて冷たい顔になり、魔法使バナナのような鼻をさげ、高低はいうまいやんと鼻はあり、鼻に汗ためてかけ引き知らぬ人、お人よし、くつろぎ過ぎた鼻の中、お世する偉人の鼻はあぐらかき、鼻すじの勝負、男装よく似合い、鼻筋がいいと写真をはめてゐる。それほど役に立たぬ鼻が、なまなま、丹前のババへ、大で、鼻をよせ、面構え、閉をはねかえす、鼻の位置、ウィンドの向う鼻がペッチャンコ、鼻先で着替えてムードこわされて、鼻合ひでは、高い鼻だ、思うたに、探す鼻、聞けば、鼻先から出され、鼻にしわよせて、無口な人となり、落人部落、成程という目鼻だ、ち、鼻想の鼻へ、しこく、蠅が舞い、鼻が、ようきいて、姑の因果なり、流れて来たのに、女房の鼻が、利き

白栂春 白栂た文圭水春生操古竹形一生た進葛柳柳万生言一竹言吸三武雄万小泉  
柳己子み秋堂客已庵方荘水夫庵宏太の庵也栄荘也江時助峯の園陸



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

# 南大阪川柳会 (大阪府) 金井文秋報

ボウリングここにも伸びた三国人  
うっぶんも悩も飛ガストライク  
淋しさは彼の本性知った夜  
トラブルを重ねた嫁の世話になり  
久し振り明治の唄で飲み明し  
発起人いつもの顔がまた揃い  
でしやばりが居てトラブルに輪をかける  
又同じ失敗したを口惜しがり  
久し振りに腹をさぐり合い  
寄附集めだけに役立つ発起人  
発起人損は言われぬ意地があり  
憎めない奴だがトラブルよう起し  
入社した日は同じでも東大出  
発起人顔効く名前並べられ  
同じ一生すておいて暮す馬鹿  
本性をむき出しにして債権者  
久し振り合えば彼女も人の妻  
戴いた値段調べに百貨店  
飲む程に旧悪が出る久し振り

好里郎 梅人 清人 滋雀 圭井堂 小松園 恒明 柳宏志 一舟 文秋 吸江 一三夫 栄 万里 双葉 金三 白柳

うれしい日同じ衣装のぬくみ着る  
旅先で思い出せない声の美女  
みな同じ腹から出たに出来不出来  
本性は惚れているのによいわず  
久し振りに大きな声で会っている  
飲む程にメッキそろそろ剥げ  
ボウリング本土をつなぐ夢の橋  
煩惱の犬身は法衣に包むとも  
日々おなじ事繰返す幸を謝し  
靴下と同じ強さに喻えられ

# 玉造川柳会 (大阪府) 西出一栄報

ビックケルを打ち込む意気に命かけ  
踏み切って再出発の市場籠  
再出発ホステス店を変えただけ  
言うだけは手ぶらで来いと言え  
いつにない兄の手みやげ不思議  
定期の台風日本が好きらしい  
天災に子供とられた日を祀り  
天災が教えて呉れた人の知恵  
天災の度に政治を吊しあげ  
横断の事故におやつは握りしめ  
高い手間出しておやつに気をつけ  
妹のおやつ大きいように見え  
念押ししてこれが最後と無理を聞く  
デパートは損せず周屋に無理を  
家中を朗らかにする孫の無理  
ミンセイにおとし子の無理聞

# 交通局句会 (大阪府) 児島与呂志報

回想で一人微笑む日記帳

凡翁 専太 飄太 竹莊 東天紅 静馬 章雅 八郎 喜仙 滋雀 寿美司 六竜子 清人 文秋 あいき 八郎 半月 一栄 柳宏子 滋雀 静馬 千葉 三時 金三 凡子 惣治

真心に触れて回想涙する  
お通夜で惜しい人柄語り合い  
回想へばつ涙声となり  
回想の涙異国の墓地に落ち  
回想へパイプ煙らし膝に孫  
ばあちゃんの風呂敷の中よい絵本  
絵本買い賢くなると約束し  
絵本みながぶいてすくすく子  
絵本見る子供の知恵も民主主義  
画伯未だ芽が出ず絵本の下絵書く  
いろはもう絵本で覚えたい子の自慢  
絵本から抜け出て子等の夢となり  
腰折になった演説野次が飛び  
腰入れて打ったバットの音がさえ  
今日だけは腰をのぼせる公休日  
しわくちな腰にもぐさが納まる  
妨害へ昔の傷をさぐり出し  
妨害をされて悟った恋の味  
残業のウソもマツチで妻にばれ  
割勘の酒へ錠剤飲んで出る  
コマシヤル通り錠剤飲みつけ  
B1錠止めて利いてたことを知り  
錠剤を水無しで飲む胃の弱さ  
胃を切ってから錠剤を手離さず  
錠剤を気安くくくれた試供品  
錠剤をもてあましている喉仏  
保健剤家族全部に渡りかね  
錠剤の魅力十年若返り  
船酔いの錠剤もある旅カバン  
錠剤が引出し一杯管理職  
錠剤をならべて飲むも趣味のうち

淡舟 みのる 雅果 漫多郎 のぼる 無扇 きみえ 一乃字 翠芳 六竜子 酔升 与呂志 正則 一歩 茶坊 孤舟 香歩 充博 松亭 清道 幸月 尚石 鳴子 多恵子 夢之 常男 洛陽 佳一

青い顔して錠剤の名にくわし  
錠剤に頼る今夜の飲みっぷり  
くつと呑めと錠剤叱られる  
錠剤を飲んで義理ある酒を飲み  
好き好き好き胃の錠剤を酒でのみ  
胃の中を錠剤だけにする病氣  
健康な喉へ錠剤ひっかかり  
錠剤を誰かがもってる飲仲間  
錠剤はみな効きそうな色を持ち

### どんぐり川柳会 (大阪市) 川村好郎報

ストローでつつけば水踊って  
水買に行けば病人かと問われ  
水柱に恋人も触れ我も触れ  
怪談めいた謎を残して疑獄幕  
出番待つお岩に暑い奈落なり  
蟬の孤独鳴けば子供に見つけられ  
苦節十年後悔してる蟬の声  
無愛想な店で腹立て忘れて来  
配達の水とけていて損したみたい  
飯病にも水枕のいる暑さ  
山門の仁王の鼻で蟬が鳴き  
網さげたまんまで浴びる蟬しぐれ  
亡き母の墓石にすがる蟬のから  
屋さがり鳴く蟬吾は恙なし  
氷柱に一刻セールス立つゆとり  
かき氷とけるよに商談すまない  
水着ただかき氷食べただけ  
配達の水触ってみる暑さ  
氷割る心も知らず無理を云い  
かき氷ハーモニーにして夏盛り

静府 洛海 春美 寿三 幸村 豊三 明徳 芳水 春果  
東天紅 孝波 静好 史太 主好 章太 胡人 奈々 幸坊 吸江 東天紅 痴亭 喜風 功雄 紀水 草春 誠二 凡子

今たべた氷たちまち朝となり  
水屋を深夜にたたき詫げて買う  
文明は怪談よりもダンブカー  
怪談を聞かせて自分が怖くなり  
怪談を聞いた夜道に犬が吠え  
怪談を聞いた表情にある凄味  
味だけはほめて無愛想苦にならず

### 大阪通信病院川柳会 森下愛論報

ボスターも夏から秋へ衣替え  
横綱の字型ボスターに利用され  
ボスターをはがと廻るアルバイ  
ボスターが扉をうずめて選挙戦  
国鉄のボスターに知る季節感  
悠々と夕立を行く傘持ちあわせ  
バス待ちの裾へ夕立ちはね返り  
車窓から見える五色のテント屋  
予約ですねんボツカリ席があき  
キャンプ場へ来ても男をまどぐ  
若人 でにぎあい見るキャンプ場

### あすなる川柳会 (大阪市) 山本素郎報

レットルをぶらさげたバスに乗り  
分裂の前の仮り寝の箸まくら  
お見合へ瞳のやり場なし箸枕  
はじかみの枕になつている議論  
名人の挿話は妻の愚痴もあり  
抱丁を持たせば名人身が持てず  
忍耐を説いてうちに腹が立ち  
レットルは十人並みと頼んどき

一人 白扇 照美 俊仙 一岳 弥生 良夫 風仙洞 愛論 富士太郎 兎裸 草右 没食子 幸男 愛論 竹莊 勝利 素郎 尤三 双楽 ゆきを 百酒 よしを 福郎 梅里 素郎

ホープを次のホープに追い越さ  
鍵つてへてこれにかえる共稼ぎ  
留守番じゃ塚があかんと見えすぎ  
二人には祭の夜が短かすぎに  
あきらめて下積み夢を子に託し  
下積みの愚痴を茶漬へ流し込み  
下積みをくやまず人の世話もする  
下積みを嫌う荷物を積み残し  
あとを追う声約束が一つふえ  
頼まれた留守に隣りが小火を出し

### 堺川柳会句 八木摩天郎報

紅一点眼鏡を掛けてうつむいて  
今雨

品質優良

## 先カペン

TACHIKAWA PEN

タチカワペン  
タチカワゼム  
タチカワ画紙

大阪市東区常盤町一丁目十一番地  
立川ペン先株式会社



目が合えば気の強さうな紅一点  
弁解をするると一層怪しまれ  
弁解へ女房までが借り出され  
弁解のつもりそうと寝てしまし  
弁解をボス聞いた振り聞かぬ振り  
弁解をしてからお茶をぐっと呑み

# 城北明老句会

(大阪府) 田中多幸報

島に來て宿の枕に波の音  
山奥の人に見せたい夏の島  
島流し時代は変る観光地  
だまされていて純情な島娘  
汽車もなく電車も知らず島育ち  
朝餉にも煮魚のつく島の宿  
かね連打それから歌手の夢を持ち  
若かりし夢も老後のかたり草  
明日からは真面目に言うて飲み

# ハワイ句会

(ハワイ) 築山快夢起報

評判の美貌に酔うて売れ残り  
穴うめの歌が評判認められ  
評判になって無実の罪に泣き  
評判の娘が迷う婿定め  
評判の女将流石に腹が出来  
すれ違ひ評判の娘へ振り返り  
評判の生そば三百年の味  
評判を気にしながら増税し  
名物は評判程の味でなし  
噂など気に止めないが身だしなみ  
評判に釣られ出な精家をあげ  
評判のよくない奴に近かよられ

こけし 左久良 摩天郎 好郎 夢遊 今雨  
茂美 繁子 多幸 濁水 芳生 弘生 源川 久休  
斧平 三石 浮葉子 嘉三 曉舟 泉山 拝山 浅茶 紅海 内海 万里歩 あき坊

評判のお国名物味が落ち  
会った見りや評判程でない男  
親切にすれば評判立つ噂  
評判が微妙にひびく票の数  
評判の客んば詐欺に引かかり  
身代が太り根性また太り  
敗戦のしこり根性立て直し  
根性が良いと言うのに裏がある  
転んでも転んでもやる土根性  
行く所まで行つて根性なお曲り  
根性を見歩く寄附の募集員  
帰化しても顔根性は元のまま  
根性の太さで兄貴顔にされ  
根性の腐れ実家を担ぎ出し  
生き抜いた男根性一つもち  
根性が足らぬをワイフ齒がゆがり  
根性はよいが子の夢怖くなり  
ひねくれが一人居るので座がとけ  
唯一つ根性悪いが玉に疵  
根性を持ってと落第励まされ  
根性が好かぬと娘やりしぶり  
根性を据えて開拓パイオニア

# 川柳かがみ句会

(岡山市)

手も足も出ず破産の日が恐い  
停電に燭台出せばパット灯き  
読んでやりやい気なものの  
童心にかけり今宵の星まつり  
吾れをよく叱りし父も急に老け  
手術後の病床午後の陽は暑し  
切れ味をためすでないが人を刺し

紅溪 快夢起 雪女 柳葉 埃子 斧平 拝山 嘉三 雪女 紅葉 紅溪 泉水 万里歩 曉舟 三石 あき坊 内海 紅夢起 柳葉 浅太 埃子

縁結び鳥居の上に石をのせ  
真夏の陽昼寝に誰も異議はなし  
新世帯持ったがぬけぬ依頼心  
袖の下おくつて無理な依頼心  
依頼心母の育てのせいにされ  
依頼心つめしつけを子は怖れ  
校長が伯父で入学希望校  
土たん場へ唯一の師の御声  
特定の人依頼心鼻のかけ  
依頼心十人十色の腹の内  
宿題をしてやる妻をたしなめる  
校内に來てまだ母に甘えてい  
当然のように保護費を催促す  
★本社句会で操子、みさ子、きさ子、みな子  
さんをよく書き違いますが、いい方法はな  
いでしょか。

宴会・折詰・出張パーティ

大 萬

町崎松区野倍阿  
TEL 02 3935・7782  
南区豊屋町三ツ寺センター  
TEL 02 9184

績次郎 周甫 古司 弘子 有子 史山 文女 晴平 蛙浪 十九平



## ・九輪水煙・

創刊号が好評だった事は

嬉しかった。追加の申込みが多くて売り切れてしまったのも思いがけないことだった。句が少なかつたという声もあったがこれは除々に殖えてゆくと思うし、またそうした努力をするつもりだからしばらく見守ってほしいと思う。

大八氏の「大陸放浪」は好読物として誌上を飾って頂いた。

「川傍柳」「太平記」は前号に続いてのせることが出来た。

同人の執筆を出来るだけ多く載せることが同人誌としての使命だと思うので、しどしど書いて頂きたい。本号には古方氏の川柳講座、梅志氏の秀句鑑賞、などがのせられたのはうれしいことである。この外にも同人執筆のものが数多くあるのだからエッセイに富んだものになつていと思う。

アンケートも同人特集として毎月続けてゆくつもりなので御協力をお願いしたい。今月は「はたらくた」を特集した。

御詫びを申し上げなければならぬことが二三あるので此欄を借りて訂正やお詫びをしたい。基本名簿が整備出来ていない為に発送がまちまちになって、早く着いた方はよいが遅くなった方には誠に申し訳ないと思つたのだが今月からはそうした手落がないように心掛けていますので御了承をお願いしたい。又同人に参加して頂いた方の句で、近作柳樽に載つたのがあったが、これは選者の方へ句稿が廻ってしまった後のことなので訂正出来なかつたことを御詫び申上げたい。

締切日が私の思い違いから早くなったのもあるので本号で訂正した。早く投句し下つた方に御迷惑をかけたがあらからずおゆるし願いたい。

十月三日の同人総会で別稿のように、それぞれの持

場がきまつたのでこれから本格的に順調に進んでゆく筈であるから絶大の御支援を心からお願ひする。

私が編集責任者ということになつてゐるが「三夫さん」に何もかも押しつけているので「三夫さん」一人で悲鳴をあげていられる、せめて雑用だけでも手伝いたいのだが思うにまかせない。同人会で編集部もきまつたのだから来月あたりから少しは楽になつてもらへるのではないかと思つてゐる。

(清水白柳)

## ・一ペン 2 篇・

▽目次の二ページはゼイタクだという人もあつたが、それははじめからわかつていた。ただ執筆者全部を目次にしたに敬意をあらわしたからである。この道でメシを食つてきて、六十六ページというヘタなやり方はお目こぼしねがえたようである。

▽雑用に追いまくられ、仕事どころのさわぎではなかつたが、小谷葉子さんと

## 会社十一月句会

日時 十一月五日(金)午後六時  
会場 自安寺(妙見さん)  
市電千日前下車スグ北側  
(電話211・1478番)

兼題 「空」

「モデル」

「予想」

「伸びる」

席題 三題(題と選者は当日発表)

会費 百五十円

★投句だけの方は五十円封入

大阪市南区鶴谷仲之町二〇

川柳塔社  
電話大阪271・3985番

う麗人の入社で、次号あたりからは「考えながら」仕事ができそうである。  
▽麻生霞乃先生の「生命の一頁」は好評だった。  
▽奥津啓一郎氏と小畑自由朗氏の原稿が次号へまわつたことをおわびしておきます。  
▼朝は十時ごろから二時ごろまで(不二田一三夫)

# ★川柳塔社同人を募る！

「川柳雑誌」の旧不朽洞会員は、そのまま「川柳塔社」の同人として、ぜひお力添えをお願いいたしとうございます。なお新同人は旧不朽洞会員二名による推選となっておりませんが、地域によっては推選者一名でも結構です。（本社から一名推選参加いたします）また推選者のいない地域で同人ご希望の方は直接本社同人部へお申込みください。一人でも多く同人がふえることは、そのまま川柳塔社のいしずえとなり、または本誌のページがふえる原動力ともなります。ご協力ください。同人費は月額二百五十円（入会金不要）同人の句は「川柳塔」へ発表し、月刊「川柳塔」をお送りいたします。

## 川柳塔社同人申込み用紙

住所・氏名・年令

職業・雅号（ふりかな付）

推選者名

同人費

半年分

一年分

金

円

昭和

年

月

日

川柳塔社同人部 御中

新年号発表 (本誌17ページ参照)

## “ユ—モア特集”

★同人総参加ノ 原稿締切 十一月二十日

### 支部創設ご希望の方に

川雑各支部は川雑終刊と共に自然解消しましたが、川柳塔支部創設ご希望の地域にはご相談に応じます。

▼本誌講読者(同人も含む)五名以上をもつ地域には支部を創設することが出来ます。

▼支部創設の場合は責任者一名を定め、支部名、支部員名簿、支部所在地と責任者の氏名と住所を本社へお届けください。

▲支部を名乗らなくても本誌講読者五名以上の川柳会には毎号各地柳壇へ句報の掲載をいたします。

川柳塔社各地柳壇係

## ご希望の方にかぎり 年賀広告受付け

下の見本が一日200円の寸法です。

原稿締切は十一月末着便まで。

話字指定等はおまかせください。

★年賀広告をどうするか、  
廃止か存続か、いろいろ協  
議の結果、ご希望の方にか  
ぎり受付けすることになり  
ました。

姓名と雅号と  
住所ぐらいよ  
りはいりませ  
んが、二日分  
なら句がはい  
ります。交歓  
五分の一段が千円ですか  
ら、柳友が組んでお申込み  
になるとお安くなります。

川柳雑誌改題  
川柳雑誌社  
振替口座大阪  
三三三六八番  
命と思つてお  
れわれの使  
用をお願いします  
なおお申込み  
の敷によつては、広告だけ  
のページにまゝとめて、原稿  
到着順に上から組む予定で  
す。

### 十二月号発表

川柳塔 (10句)

近作柳樽 (10句)

課題吟 (10句)

「夜 聲」  
「ウインド」  
「云いわけ」

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

中島 生々庵 運  
北川 春 巢 運  
若本 多志 運  
菊 沢 小松園 運  
川村 好 郎 運  
直原 七面山 運  
田村 藤 波 運  
長谷川 三 司 運

### 新年号発表 (11月15日 締切)

川柳塔 (10句)

近作柳樽 (10句)

課題吟 (10句)

「馬」  
「眼 服」  
「珍 客」

★川柳塔の投句は本社同人に限りま  
す。★用紙はなるべく柳箋をご使用  
ください。

北川 春 巢 運  
若本 多志 運  
中島 生々庵 運  
松江 梅 里 運  
西 尾 葉 運  
木山 遠 二 運  
山 川 阿 茶 運  
尼 緑之助 運

GOLDEN  
O.S.K

の紳士服

スマートで  
着心地のよい



株式会社  
オーエスケー



定価 百二十円 (送料六円)

半年分 七百五十円 (送料三  
一年分 千四百四十円 (送料七)

昭和四十年十月二十五日印刷  
昭和四十年十一月一日発行

大阪市南区谷町二丁目一番地

大陽印刷株式会社

中島 達太郎

川柳塔社

大阪市南区谷町二丁目一番地

電話大阪・二七一一二九五番

振替口座大阪・三三三六八番



昭和四十年十月二十五日 印刷  
昭和四十年十一月一日発行 (毎月一日発行)

川柳塔十一月号



清酒  
**日本盛**  
ニホンサカリ

灘 西宮酒造 釀

超特撰 (化粧ケース入)  
「ハリットル詰・一、二〇〇円」



えらばれ  
みがきぬかれた 灘の酒  
超特撰 日本盛



料理も電話も

**551**

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広 東 料 理

豚 饅 蓬 菜 焼 売

大 阪 な ん ば

◆出張販売店◆

なんば高島屋店・心齋橋そごう店・梅田阪神百貨店  
天満京阪ストアー・弁天阜頭港店・中之島サン・ストアー

定価 百二十円 (送料六円)